
皇女と招獣

ばいばるす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皇女と招獣

【Nコード】

N6088B

【作者名】

ばいばるす

【あらすじ】

十四歳。女。皇帝の唯一の嫡出子でありながら、疎んじられている。政治的暗愚である母親は、父の政敵である。潜在的競合相手である兄は、庶出でありながらも、人望あつく、能力に秀で、父帝のおぼえもめでたい。彼女が玉座を狙うことは、いらぬ波風を立たせるだけのことだと、部下は言う。それでも、彼女は自らの意志で、皇位争奪戦に乗り出すことを決意する。手段など選べるはずがない。

(閲覧にはPCをお薦めします) 【連載無期限休止中】

序

その日、相馬成隆は、屋上に立った。

よく晴れた夕空だった。日暮れも近く、空も紅色に色づき始めている。右手に学生鞆を、左手にコンビニ袋をさげて、四方の空間に臨む。

腐食の目立つコンクリートの床、風に煽られる朽ちた金網、舞い上がる砂礫、鍵が壊れペンキがはげ掛けた屋上のドア・・・廃ビルに相応しい景観だが、眺めだけはすばらしい。

林立する建物群がパノラマに連なり、眼下の街が一望の下に見渡せる。よく出来たミニチュアセットのようで、矮小な足下の世界から自分だけが隔絶しているような感覚。孤独だが、決して不快ではない。

最初にこの廃ビルの屋上に立って、夕陽をみた時の事を思い出す。詩的な表現は得意ではないが、とにかくいつもビルの谷間で見るものとは別物で、広く、紅く、静かに燃えていた。計画を決行するならば、こんな場所がいいと思った。

最初の数回は下見もかねて一人で、その後からはよく友人を誘って放課後をここで過ごした。食べたり、飲んだり、喋ったり、ありふれた学生生活の一ページだ。

だから今、この時、ナリタカがここにいる事もなんら不自然ではない。塾に通うまでの僅かな時間をいつもの溜まり場でくすぶっているにすぎない。学生鞆は放課後、家に帰らずにここに直行したからで、コンビニ袋は無論のことコンビニに寄ったためである。中にはペットボトルの麦茶と野菜サンドが入っている。どちらもナリタカが鼻屑にしている銘柄だ。

部屋に帰れば中学男子に相応しく、開いたままの引き出し、電源のつけっぱなしのパソコン、脱ぎ捨てられたパジャマ、散乱したCDや書籍。

机の引き出しの奥には来週に迫った母の誕生日のプレゼントがおさまっている。既に包装済みであるからプレゼントであることは一目瞭然だ。思春期の男子にしては、珍しいともいえるが、毎年あげてきたものだ。今度に限ってあげないという事は出来ない。どんな些細な事でも今は用心するべきなのだ。

ナリタカは学生鞆を放り出し、コンビ二袋を開いた。塾に向かう前の腹ごしらえといったところか。ラップをはがし、サンドイッチを口に運ぶ。胃が重苦しく、二口三口がやっとだった。無理をおして、咀嚼し、麦茶を流し込む。半分ほどペットボトルを空にするとナリタカは立ち上がった。

右足と左足を交互に動かす。歩くという作業がここまで困難なものになり得るとは思わなかった。一步、一步、歩を進めること、こみ上げてくる吐き気と格闘する。友人の顔、家族の顔、浮かび上がったのは消えていく顔の群れに決意は揺らぎ足は幾度も止まった。

怖じるな、そう言い聞かせた。ここまできて、やめる事などできない。三ヶ月という時間を費やして、ここまで来た。そして、今、これが最後の仕上げなのだ。

永遠とも思える時間の果てに、ナリタカは朽ちた金網をすり抜けて屋上の端に立っていた。体中、冷えた汗に濡れて、寒い。風が強く、ともすれば体がぐらつきそうになる。

地面を見下ろすと、遠い。そこに叩きつけられた時の情景を想像すると、さらに遠く思えた。即死は免れない高さだ。自分自身の事とはいえ、命を殺めるという行為にそれなりの感慨を禁じえない。誰にも知られず、誰にも悟られず、事故として死ぬ。そう考えると、涙が溢れた。

目を何度もつむっては見開いた。ぼやける彼方の地面を見つめ、見据えた。

足を宙に踏み出した。

序（後書き）

プロローグだけでもお読みいただき、ありがとうございます。何分にも長い話なので、途中までしか読んでいなくても、なんらかの反応を感想などの形で残していただけたら、非常にありがたいです。

第一話 皇女 (1)

緑なす木々。木立を抜ける風には初夏が薫る。

ベルグ王立学院の遊歩道をゆく少女の足取りは速かった。何を急いでいるのか、淑女にはあるまじき歩調で、一步ごとに鮮やかな緑の裳裾が翻る。

声をかけるのが、ためらわれるような急ぎようだ。

いや、もつたいたい、というべきだろうか？ 少女の急ぎ足の訳を知っている男としては、もう少し目を細めて見守っていたいような光景だった。

しかし、通り過ぎるにまかせる訳にもいかない。

「イリユ・シャ様っ！」

立木の傍らに身をよせた男の前を、あわや素通りしようとしていた少女の足が、それで止まる。

振り返った少女の碧眼が自分を映して見開かれるのを、男はこりと笑って見返した。

少女の表情が驚きから、男を認識したそれに変わり、次いで満開の花のような笑顔がこぼれおちる。

男はその変化を見届けると、腰をかがめ、深く頭をたれた。

「学院長殿にお聞きいたしました。殿下を待ち伏せ申し上げるにはこの場所が一番との事でしたので」

腰を低くしても尚、少女の頭部は目線より遙かに下の位置にある。それでも、並ぶと身長之差が縮まったのが良く分かった。

「ああ。私もたった今、護衛隊の到着を耳にした。シンハ、お前が隊長だそうだな。先行きの不安なことだ」

先ほど、覗かせた無防備な表情はどこへやら、少女は早々に笑みを収めて憎まれ口を飛ばしてのける。

三年振りの挨拶にしては、あまり感動がない。もつとも、男・シンハにしても主人の事を言えた義理ではないが。

「では、一刻も早く私めに会いたいがために、あのように息をせき切らして走っておられたのですか、光栄です。」

「たいした自意識過剰だ、お前は。護衛隊の隊長に労をねぎらい、声を掛けておくのは皇女としての責務の一環だ。別に、お前がどうした、という訳じゃない」

予想通りの反応を、予想に違わず返してくれる。

相手がムキになる事を知っていて言っている辺り、シンハにも反省の余地はあるだろうが、何故だかこんなやりとりが、ひどく懐かしかった。

「長らく、お側を離れたこと、まことに申し訳ありません」

そういつて、跪き、イリユーシャの左手の甲に口をつける。主従の礼。捧げる方も、またそれを受ける方も、横たわる歳月の隔たりにぎこちなさを隠せなかった。

「致し方ない。私は他国に留学中の身だ。お前にしろ、仮にも、武門の名家エトキアの人間だ。よもや、武官としての立身出世を放り出し、学び舎で皇女のお守りをする訳にもいくまいさ」

「一日千秋の思いでこの日をお待ちしておりました。イリユーシヤ様におかれましては、ずいぶんと、お変わりになられた。不肖ながら、私、その見事な黒髪を認めるまでは気づきませんでした」

「主人の顔を見忘れるとは不遜なヤツだ」

茶化した口ぶりの中にもシンハの言葉に嘘はない。

三年ぶりの再会は十一歳の子供を十四歳の少女へと変えていた。

幼少の時分から皇女の容貌は宮廷中の誰もが認めるところだったが、妙齢に差し掛かった今は正直、静止がづらいほどだ。

よく冴えた碧い瞳だけはそのままだ、長く伸びた黒髪、印象的な横顔、一見男性的な所作さえも、色と艶を増した。

それは固く閉じていた蕾がほころび始めるのにも似て、シンハを戸惑わせた。彼の中の皇女はずっと、三年前の別離の折に、固く引き結んだ唇と、わななく小さな肩で、涙をこらえていた、いとけないう子供の姿で時間を止めていた。

これでは本国に戻っても伊達男を気取る宮廷の貴公子達が放つてはおくまい。皇女という身分、また本国における彼女の立場上、おいそれと口説ける人間ではないが、中にはそれを理解しない者もいるし、それを踏まえて近づいてくる者ならなお悪い。

これ以上、問題事が増えねばいいのだが。

「それほど、私は変わったか？」

「背が、お伸びになられた」

「背ばかりが伸びた、と言いたいのか？」

とんでもない、とシンハは首を振る。

「背に比例して髪も一段と長くなりました」

「・・・へらず口は相変わらずだな。もつとも、昔はひよる長いばかりだったが、少しは横幅が追いついてきたようじゃないか」

憎まれ口をたたくイリユーシャをよそにシンハは涼しい顔で笑っている。

「これでも少しは成長したつもりだ。以前のような子供扱いは、許さん。少しは気を引き締めて仕えるのだな」

「はい。肝に銘じてまいります」

幼さの残る主人の不機嫌な横顔は昔と変わらないように思えた。なのに、なぜ時ばかりがこうも早く過ぎ去ってしまうのか。イリユーシャが曲りなりにも自由を謳歌できた時間はもう終わろうとしている。いや、もう終わってしまったのかも知れない。今日、この王立学院の中庭で。

自分はそのために皇女を迎えに来たようなものなのだ。

「それで」

と、イリユーシャの表情が変わった。再会をなつかしむ風情はいつの間にやら掻き消えて、事務的な口調にとって変わられる。

「本国への皇女の護衛がお前ひとりという事はなかるう」

辺りは見通しがよく、人の往来も少ない。ベルグ側からあてがわれた護衛とも充分距離を置いている。話を聞かれる心配もなかった。

「中隊長二名以下、学院の外にて待機しております。ご出発の目

途がたてば、明日にでも発てます」

「・・・そうか」

その声の微妙な抑揚をシンハが見逃すはずもない。ラトギアの皇女の送迎兼護衛の任に二個中隊ではいかにも貧弱だ。野盗の群にでも襲われたら、それだけで危うい。だが、本国には本国の事情もあった。

現在もつとも玉座に近いのはイリユーシャの異母兄にあたる第一皇子カーライルというのが衆目の一致するところではある。

皇帝の寵姫を母に持ち、その実家の後ろ盾を初めとして宮廷内と軍部に相当数の支持を得るカーライル皇子は、才気煥発、武勇にも秀で、先の東伐の折にも華々しい戦績を上げている。また、皇帝の覚えもめでたく、瑞兆といわれる皇室の血継能力を現す。

しかし、庶出である。

この皇子を含めて皇帝に嫡出の男子はなく、皇妃ただ一人の実子であるイリユーシャの立場はいきおい難しいものとなる。

ラトギアは女子の皇位継承を認める。むろん男子のそれが優位だが、嫡出が女子のみとなれば、女帝や、その夫となる者との共同統治という選択肢も排除出来ない。

明確な後継者を欠いては御家騒動の元であると、皇帝は事あるごとにカーライル皇子を引き立て、自らの後継者であることを示してはきた。しかし、問題はそれを座視して耐えるような皇妃ではなかったということだ。

皇帝と皇妃、ラトギアでもつとも高貴な夫妻は、そもそもその結びつきからして政略結婚で始まり、夫婦仲も相応に冷えたものだ。とはいえ、皇妃にとって、皇帝が可愛がる側室の息子の存在が面白い筈もなく、ましてやそれが時期皇帝につくともなれば感情ばかりの問題ではなくなってくる。

歴史をかんがみれば、新たに権力の座についた者がする事は復讐

や肅正と、まずは相場が決まっている。

実際にそのような事が起こるかどうかは別として、人は己を基準にしてものを考えるものである。そして、皇妃は人にうらまれる理由なら事欠かない人間である。

たとえ皇妃にどのような悪徳があろうとも、カーライル母子にしてきた数々の嫌がらせをを忘れるほど無神経ではなかったし、またその結果についても考えるだけの想像力も持ち合わせていた。

ゆえに、保身という見地からしても、皇妃がイリユーシャという駒を手に皇位争奪の前哨戦に参戦するのは必然の成り行きだった。

連日のように私邸で怪しげなサロンを開き、宮廷で冷遇されている貴族や国内外の不穏分子と接触し、実家であるナーガ王家に不満や嘆願の手紙を書き散らす。

幸か不幸か、皇妃にはその野心に見合うだけの政治能力はなく、地位が地位だけに周囲も苦々しく思いながらも放置していた。

だが事がカーライル皇子の暗殺未遂事件に至っては、もはや笑い事では済まされなかった。確たる証拠こそあがらなかったが、事件の裏にいる首謀者の名前がささやかれる中で、皇帝は何らかの措置を取る必要性に迫られた。

それが、イリユーシャの留学に繋がる。他国留学は皇女修道院入りに反対する皇妃に妥協した折衷案であった。皇妃派に対する圧力、問題の根源であるイリユーシャに対する処置、なによりも、それによつてカーライル皇子の後継者としての地位が磐石磐石になる。皇妃派もかつぐ御輿がなくてはどうにもならない。

要するに呼び戻しても問題のない時期がくるまで、イリユーシャを国外に置くとういうものである。体のよい、追放ともいえる。

今回のイリユーシャの帰国をあまり大仰に出来ない理由はその辺りにあると考えられる。それにつけても二個中隊とは少なすぎるという感が否めないが。

「皇妃殿下は相変わらずか？」

一段と事務的な口調でイリユーシャは言った。

「以前にも増して、お健やかであります」

「こたびの帰国の命、皇妃殿下の口添えあつての事ではないな？」

斬り込むような問いに、シンハは即答できなかつた。答えを知らぬのではなく、これで次に皇女に報告しなければならぬ事項が決定してしまつたからだ。

遅かれ早かれ伝えなければいけない話にも関わらず、この期に及んで先延ばしにしたがつていた自分に気付いて、シンハは自嘲する。これでは、確かに皇女を子供扱いなど出来ない。

「はい。この件に関して、皇妃殿下の関与はありません」

「だろうな。時期尚早だ。現時点において、父上・・・陛下が、私の帰国を無条件でお許しになるはずもない。余計な火種はない方がいい」

先をうながす視線を受けて、シンハは口を開く。

「まだ内々の話ではありますが、イリユーシャ様に縁談の話が持ち上がったっております」

イリユーシャの顔がわずかに歪み、紅い唇が笑みを刻む。

「やはり、な・・・また、外国に追放ということか」

国内ではない、というイリユーシャの確信は正しい。

ラトギア皇家は降嫁した女子の皇位継承権の存続を許す。まかり間違えれば、イリユーシャの婿が次代の女帝と共に玉座に座ることになり、同時にイリユーシャへの処置としてもこれは適切ではない。だが、外国に嫁すとなれば皇位継承権は返上され、イリユーシャも国を去る。だから、イリユーシャの結婚相手とすれば国外の人間でしかありえないのだ。少なくとも皇帝はそう思っているだろう。

いや、とイリユーシャはかぶりを振つた。

「前回とは違つた。今度はいふなれば永久追放、皇位継承権も奉還せねばなるまい・・・めでたい事だ。これで次期皇帝たる兄上の障害が一つ除かれ、陛下の御心もやすんぜられるというもの」

「・・・イリユーシャ様」

痛烈な皮肉は自虐と背中合わせか。

肉親の情愛に恵まれぬのは皇族の常。だが、カーライル皇子暗殺未遂事件とその事の顛末は、当時十歳だった子供には酷であった、とシンハは思う。

父帝の冷淡なまでの無関心、イリユーシャの立場を悪くするばかりの皇妃の執念、政争と利害闘争のうずまく宮廷。

それらは、感受性豊かな時期のイリユーシャにどんな影響を及ぼしたのか。聡い子供であっただけに、その懸念は強い。

シンハ、とイリユーシャは苦笑する。

「そんな顔をするな。私が悪かった。聞き苦しいことをいつてすまなかつたな」

皮肉気な語調はもうない。困ったように肩をすくめている。

「それでは、そろそろ私の未来の夫について教えてはくれないか。相手の名ぐらいは知っておくなくては礼儀を失するというものだ」

「お相手はナーガ王が第二子カルーガ様であります」

沈黙。そして、瞠目。

「わが従兄妹殿ではないか」

イリユーシャの母である皇妃の出身は隣国ナーガ、現国王は皇妃の兄に当たり、その息子は確かにイリユーシャの従兄妹である。

「・・・まあ、ナーガ王家ならば格式からいっても不足はないし、ラトギアにとっても経済的、軍事的に重要な国だ。婚姻を通じて両国の絆を深める訳も分らないわけではない。また、跡取りの第一王子は生来病弱で、実質的な後継者はカルーガ殿だとか・・・」

ナーガ王妃。それがイリユーシャのために用意された後継者争いを降りる事への対価なのか。イリユーシャの前ではただの一度も父親らしい顔を見せたことの皇帝の、せめてもの親心だともいうのだろうか。他にどのような心算があるにせよ。

そうであればいい、とシンハは切に願う。この年若い主人は自分が父親にとって「障害物以上の存在ではない」と思い込んでいる。

かつてシンハに漏らした、その言葉に否定を望む心理がなかったとは思えない。

「もしも……」

そのまま文章を完結することなく、イリユーシャは口を閉じた。視線はななめ下方を向いている。

「……仮に……いや、そうなる公算のほうが高いだろうか……」

言いよどむイリユーシャは珍しかった。はい、とシンハがうながしても、視線はうつむいたままだ。表情が見えない。いや、見られたくないのだろうか。

しばらくの沈黙の後、ようやくイリユーシャは顔を上げて、シンハに対した。その様に、もはや逡巡はなく、代わってどういうわけか緊張が見てとれた。冴え冴えとした碧の眼差しがシンハを射る。

「私が、ナーガに嫁いだら、お前は どうする？」

本流ではないにしろ、シンハは名門エトキア家に名を連ねる身だ。武官としての経歴もラトギアにいてこそ保障される。

イリユーシャとしては、国を去ってまで付いてきてくれとも頼めないのだろう。もとより、そういう性格ではない。勢い、突き詰めるような問いの形を取ったのだろうか？

いずれにせよ、シンハは嬉しかった。本心はどうあれ、勝手にしろと突き放されるよりは、よほどいい。プライドの高い彼の主人の、これは精一杯の請願なのだ。

「お忘れですか？」

学院内の帯刀は禁じられている。シンハは空の剣帯を指し示した。「私は殿下に剣を捧げた身です」

その答えは不足だったのだろうか。シンハの答えにイリユーシャの視線がゆるむも束の間、それを律するように唇をかみ締める。

「私は……」

伏せた顔の奥から、感情を切り替えるようにイリユーシャは言った。

「私は、叶うことならラトギアを離れたくないし、政治の駒として弄ばれるのも不愉快だ」

それから、くるり、と背中を向けて、シンハに問う。不自然なほど明るい調子だった。

「避ける手立ては、あると思うか？」

「イリユーシャ様、よもや妙なことを考えては」

「案ずるな」

シンハを遮って、畳かける。

「なにも出奔するとか、婿殿をどうかしよう、などと言ってるわけではない」シンハの主人が言うと、いまいち笑えない冗談だ。「むしろ勝算はそれより低い。策としては下の下。策と呼べる代物ですらない。ただ・・・」

皇女は背中を向けたまま、シンハが聞く限り今日二度目の溜息をつく。

「何事も、試さないよりも、試すほうがマシだということだ」

第一話 皇女 (2)

屋敷の正面に馬で乗りつけ、番衛に手綱を渡す。

ベルグにおけるイリユーシャの住居は学院の東北、王宮にも程近い。イリユーシャがベルグ王家に貸与されたこの屋敷は、聞くところ、名高い建築家の手に成り、エストニア様式を基調としながら随所に作者の創意が散りばめられているのだそうだ。

とはいえ、シンハには建築様式や芸術の事はよく分らない。

むしろ、優美な屋敷の外観を著しくそこねる高く堅固な塀や、ものしいばかりの衛兵の数の方に目がいった。

塀や衛兵が後になって増強されたのは明らかで、屋敷は小さな要塞の観を呈している。

建造者の悲哀や、皇女を受け入れたベルグ王家の苦労が偲ばれる。他国の要人に万が一の事があれば、外交問題に発展するのだから、その気苦労も一方ならぬものである。無論、ベルグとて善意ばかりでラトギアの皇女を迎え入れた訳ではないのだろうが。

気になったのは衛兵に対して侍女、侍従や下働きの数が少ないことだ。そういえば、ラトギアからついてきた使用人の大半は風変わりな主人によつて本国に追り返された、と聞いている。この件に関して当人に質したところ、

「監視役だ。あんな連中に周りをうるつかれていては早晚、窒息死してしまう」との事だった。

監視役とは、皇妃の、という意味であると同時に、皇子派や中立派の可能性をも含んでおり、実際いまのラトギアの宮廷では誰が誰に間諜を送っていたとしても不思議ではない。

貴族のお屋敷では間者と間者が鉢合わせする、などと巷では囁かれている有様だ。

監視役といえればそれに類する者がベルグ側からも当然、非公式か

つ非公認で送られているはずであり、イリユーシャが身の回りの者を増やさないのは、そういった面を考慮しているのかもしれない。しかし、これだけ手狭ではいかな彼等とて雑務に追われて満足な働きは出来そうにない。

皇女の居室は本館の二階、螺旋階段を上がり、廻廊の突き当たりであった。

皇族の姫としては質素にすぎる居住空間ではあるが、平民にしてみれば夢の暮らしだろう。

室内は三間続きで、それぞれ居間、寝室、書庫となっている。書庫が居室の中にあるというのは奇異な配置だが、イリユーシャに言わせればその方が広い屋敷を歩かずにすみ、便利であるらしい。

聞けば正式な書庫は別にあるという。さすがに調度の類は皇族の面目を保ってはいたが、どういう訳か、書庫が残りの二部屋を侵食し、全ての部屋が本に埋もれる勢いだ。

活版印刷などの技術はないのだから、本の複写は人の手に頼らざるをえない。当然その値は高く、平民階級の文盲率と相まって、読書は特権階級にのみ開かれた娯楽となる。奢侈品に興味を示さないイリユーシャが、本国の仕送りの増額を要請してきたと聞いて不思議に思ったものだが、なるほど、こんな所で浪費されていたらしい。

「いつから、これほどの読書家になられたのですか？学者にでもなるおつもりですか？」

シンハの覚えている限りイリユーシャは利発ではあっても、さほど勉学に傾倒している様子ではなかった。

「知識はあつて困るものではない。それに、これらは主に魔道関連のものだ」

「……学者ではなく、魔道士でしたか」

イリユーシャは笑いながら、シンハに着席をうながした。

「魔道といつても、特殊魔道の範疇にはいる血継能力に関して調

べていた。ラトギア皇家の血継能力、俗にいう、『招獣の技』だ。お前でも、それくらい知っているだろう？」

血継能力、その名の通り特定の血筋にのみ現れる特殊な魔道関連の能力のことだ。

いかに魔術の才に恵まれようと、血族以外の人間には習得は不可能。過去に絶滅したものを含めて、その報告例は少なく、その方面の研究もあまり進んでいない。

例としてはラトギア皇家のものが筆頭に上げられるが、能力の持ち主が皇族であること、また皇室じたい、その詳細を外部に漏らすのを嫌うという点から、学術的協力は望めないのだと聞く。

シンハの知る限り、それは「招獣の技」と呼ばれ、異界より神獣を召還する術である。能力者はその身を媒体に、かの者呼び寄せ、血の誓約を交わす事により、それを使役する権利を得る。ラトギアに生まれた者ならば、幼児でも知っている事である。シンハとて幼少の頃、年齢相応に胸を踊らせて、大人たちに招獣の話をせがんだものだ。

寝物語に聞いた伝説や冒険譚の中、ラトギアの王や皇帝達の傍らに、招獣は寄り添い、その主人とその国の守護を約束する。

語り部の語るところ、それは神の恩寵であり、その恵みを受けた者が玉座につけば、国は繁栄するのだと言う。希少な能力であるそうだが、現にイリユーシャの異母兄カーライル皇子はその恵みを受けている。

彼の使役する「焰」という名の招獣を、シンハも遠目ながら目にした覚えがある。鳥とも獅子ともつかぬ奇怪な姿をした生き物を、その時の驚愕と共に記憶している。

「これは一般にはあまり知られぬ事だが、皇室に連なる者は全て傍系も含めて、十になるかならぬかの内に、この能力の有無を調べるための資格審査を受ける。理由は・・・多々あるのだろうが、その最たるものは、才に恵まれた者の国外流出を避けるためだ。特に女子の場合、婚姻を通じて、他国に出る可能性が高いからな。今の

私のように」

実際、他国に嫁した皇室の姫が、その後能力を持つ子供を出産した、という事例もわずかながらある。

血の濃さに比例するためか、能力の発現は概して直系であることが多い。ラトギア皇家が血族婚を好む一因もこの辺にある。

「庶出にも関わらず、誰もがカーライル皇子・・・兄上の皇位継承者としての正当性に異議を挟まないのも、この能力の持ち主である事が大きい」

何ゆえあつての長広舌か。

「招獣の技」とイリユーシャの現状がどう関係するのか。シンハはイリユーシャの真意を測りかねていた。

「もし、仮に私が能力者であつたとして、三年前の資格審査において能力を発現していたのなら、このベルグの王立学院にいる事はなく、今また他国に追いやられようとする事もなかった。後継者争いはより複雑なものとなり、父上も、そう簡単に私を遠ざける事は出来なかつたはず。皇妃の下手な裏工作などなくとも、宮内は皇子派と皇女派と、大きく二つに割れていたかもな」

そうすれば、面白いことになっていた。そうは思わないか？くつくつとイリユーシャは笑った。

「しかし・・・イリユーシャ様は資格審査の折に・・・」

「そう。私は資格無し、と判断された」
だが、と言葉をつぐ。

「過去に、数度の失敗を経て、招獣を召還したものもある。つまり、能力の有無は資格審査だけでは判定しきれない、そういうことだ」

最近、文献を調べていてそういう例がある事を知るまでは、自分の判定に疑念を抱くことすらなかった。我ながら馬鹿な話だ、とイリユーシャは肩をすくめる。

漠然と浮上してくる一つの推論はシンハは否定しなかった。あまりにも馬鹿げている上、可能性としては万に一つもなく、自らの意

思のみでどうなるものでもない・・・はずだ。

「シン八、私は『招獣の技』の成功率を高めるだろう方法を知った。あまり、乱発できる手法ではないが」

「どうやらの様だった。」

シン八は返答に窮した。馬鹿な事を、と笑えばいいのか、諫めればいいのか。

「私は出来ることなら、招獣を持ちたいと思っている。そうすれば、教会が数少ない能力者を手放すはずもなく、まず目先の縁談は間違いなく潰れる」

「・・・」

皇女の言葉を反芻する。

「といいまして、そもそも可能なのでしょうか。どのようにして？あれは天賦の才の筈では？」

「お前に魔道の事など話しても仕方ないだろう。確率を高める方法があるだけ理解して置けばいい」

イリユーシャの説明はシン八を納得させるには足りなかったが、どうやら本気らしいという事は理解できた。

イリユーシャは昔から利発な性質であったから、周囲はその精神の成熟度までも過大評価しがちだ。しかし、どうやら自分までも知らず知らずの内にそうであったようだ。

「お前の話を聞いて、決心が着いた。私は『招獣の技』をもう一度だけ試みる」

有無を言わせぬ口調だ。ごくり、と唾を呑み、シン八はイリユーシャを見る。馬鹿な話だ、という理解に変わりはない。だが・・・

「臣下の分を弁えぬ僭越ながら、言わせていただきます」

「許す。言え」

「もし、仮に任意に『招獣の技』を会得する事が可能だとして、イリユーシャ様おん自らそのような道を選ぶとするならば、せつかく収まった波風を再び荒立たせることになりかねません。確かに縁談の件は流れましようが、先ほどご自身がおっしゃられていたよう

に、後継者争いは以前にも増して複雑なものとなり、皇妃さまにも諦めがつきかねる事態となります。皇帝をはじめ、皇子派も黙ってはおりませんまい」

「そのとおりだ」

「好むと好まざると、イリユーシヤ様はカーライル皇子に比して有力な後継者候補としての名乗りを上げる形になり、そうなれば宮廷はおそらく二派に別れ、政争は混迷を極めましょう」

「……続ける」

「それは、ラトギアにとり、国民にとり、ひいては殿下ご自身にとつても不利益にしかならないと存じます。最悪、後継者争いが内乱に発展する可能性も否定できません」

イリユーシヤが「招獣の技」に成功するとは思っていないが、もしイリユーシヤ自身が、そのような心構えで本国にもどるなら、不穏な事態を引き寄せかねない。かつぐ御輿としてはカーライル皇子の次に最適ななのだから。

まかり間違えれば、ラトギアにとっての災禍。それとも、自らそれを望むというのか。

「その上での覚悟でしょうか？」

「……覚悟、か」

イリユーシヤは左腕の袖をまくった。初夏には不釣合な暗緑色の長袖の下に、真新しい包帯がのぞく。血のついた包帯が一巻きずつほどけて、音もなく床に落ちていった。

「……イリユーシヤ様」

白く細い腕に走る無数の裂傷にシンハは顔を強張らせた。古いものと、新しいものと、治りきらぬうちから十重二十重に切り刻まれたのだらう。所により赤黒く変色して膨れあがっている。

「招獣の技を試みた跡だ。あれは、血を贅にするからな」

見かけほど痛くないんだぞ、と笑う。

「いろいろと試した。あらゆる魔方陣を描き、神言を唱え、何十回となく召還を試みた」

肩をすくめる。

「残ったのは、この傷跡だけだ」

シンハは無言だった。視線ばかりが傷口をなぞり、強張る。

「・・・馬鹿なことを」

その後は言葉が続かない。

「これがお前のいう覚悟といえるかどうかは疑問だが、少なくとも私は本気だ。お前が何といおうと考えを変える気はないし、試す以上は失敗する気もない・・・私は、『力』が欲しいんだ」

第二話 招聘 (1)

ぴちよん。

最初は、水の滴る音だと思った。

ぴちよん、ぴちよん。

額を打つ規則的な刺激。ぬるりとした感触は額からこめかみをつたって、耳に流れる。その重たげな軌跡から水よりも粘度の高い液体である事が分かった。金錆びた匂いが、鼻孔をくすぐる。

血。

不思議と、恐怖も嫌悪もなかった。いや、むしろその逆だ。

血は、暖かくまだ人体の温もりを留めていて、触れた箇所からその温もりが染み入ってくる。皮膚をとおして、その血を流した者の体温や脈拍まで伝わってくるような、奇妙な、だが鮮明な感覚。

ナリタカは、ゆっくりと目を開けた。

橙色の光の群が飛び込んでくる。周囲の明度に慣れ、ぼやけた視界が少しづつ戻っていく過程で、それが松明の炎なのだ知る。久しく目にする事のなかった類の炎だ。

自分を囲むようにめぐる松明の円陣。床をつたい絡まる不思議な紋様。だが、それを疑問に思い、いぶかしむ程にはナリタカの意識は覚醒していなかった。まどろみの抜けきらないまま、ナリタカは体を起こした。

血は上方から滴り落ちていた。のろのろと視線を上げると、白い腕があつた。その肌を裂いて走る傷口にはいまだ剣の刃があてがわれており、流血は止まっていけない。

血。白い腕。白い服。黒い髪。上へ上へと視線でたどり、その顔に到達した所で止まった。

碧の眼。瞳孔を凝縮させ、食い入るようにナリタカを見ていた。

「…お前は」

かすれた声。変声期前の少年のような中性的な声だが、その長い

髪と男にしては整いすぎた顔が相手の性別を表している。

はじめて見る他人の筈なのに、なぜだか、ひどく身近に感じられた。

「お前は……何だ」

その問いの意味と、少女の驚愕の訳を計りかねて、ナリタカは呆然と相手を見返した。

血と刃物と少女の存在が、ナリタカの眠気を駆逐していった。どこかの民族衣装のような珍妙な格好をして、自分の腕を刃物で傷つけている異国の少女。

それだけでも理解の範疇を十分に超えている。加えて、少女の台詞と疑念に満ち満ちた目がナリタカを戸惑わせた。他人に対して物を尋ねる際の礼儀はともかく、普通、人は人に、お前は何だという風には問わないだろう。

「招獣……なのか？」

単語の意味が分からず、ナリタカは痴呆のように相手を見返した。

「私の言葉が分かるか？」

「……………」

頷いた。

「…そうか」吐息は重い。「お前は、その……人間、ではないのであるうな」

訝しげな視線を返すと、少女はゆるくかぶりを振った。いや、いい。そう言い捨てて視線を伏せる。困惑はナリタカだけのものではないようだった。

あの、と遠慮がちに沈黙を破ったのはナリタカの方だった。

「怪我…大丈夫ですか？」

少女は目線を跳ね上げてナリタカを凝視する。驚きも新たに、もの珍しいものでも見るかのような目。まるでナリタカが声を発した事それ自体がさも驚くべき事であるかのような。

「…血が」

そういつて、またも遠慮がちに手を伸ばす。冷たく、滑らかな皮

膚を指の腹に感じるや否や、びくりと相手が後ずさり、拍子に短剣がその手を離れて宙を舞った。

金属製の音が静寂に響き渡り、床に描かれた幾何学的な紋様が少女の足下で乱れた。

刹那、全てがぶれた。

松明の炎も、床の紋様も、仄かな暗闇も、ナリタカを映す碧眼も、視界が引き伸ばされ、細くなり、長くなり、やがては線となって消失した。

ナリタカと共に。

「……消えた？」

嵐の後の静けさ。沈黙にシンハの声が落ちた。

松明の炎は全て吹き消えて部屋の隅に灯る獣脂の明り取りが、ほの暗く室内を照らしているばかりだ。方陣の紋様は跡形もなく崩れて、その中央にあった少年の姿も今はない。皮膚に残る衝撃波の余韻が今しがたの出来事が現実であったことを物語っている。

「イリユーシャ様っ」

術中は何が起ころうと介入するなとイリユーシャは言いおいてあったのだが、これは彼女自身にも想定外の状況だった。支え起こそうとするシンハの手にも気付かず、空っぽの方陣を一心不乱に睨みつける。

「……私のミスだ」

荒い呼吸の下でイリユーシャは言った。

「……あれしきの事で！」

悔恨に満ちた呪詛を呟き、イリユーシャは拳を地面に叩きつけた。方陣を描いていた粉末状のものが衝撃で舞い上がる。

「たかが、あんな事くらいで、集中力を乱すとは」

方陣を足で踏みにじってしまったのは、ほんのきっかけ、言わば

ほころびに過ぎない。方陣や神言や種々の儀式はあくまでも術の補強に他ならなく、術は本来、術者の資質と精神力による。集中力さえ途切れなければ、術を破綻させるには至らなかつた筈だ。

だからこそ、この結果は言い訳の余地なく術者自身が、イリユーシャが招いたものだ。想定外の状況であり、確かに虚をつかれたが、術の途中で精神の集中を乱すなど初歩中の初歩、素人のやる失敗だ。正式に魔道を学んだ者のする事ではない。

招獣の召還に現れたのは人間だつた。

少なくとも外見は人間にしか見えなかつた。なお、解せない事に子供・・・少年と言えはいいのか。イリユーシャ自身とさして変わらない年齢。せいぜい十三、四の少年だ。

人間の姿をして、人間のように言葉を発す。その戸惑つた表情。気遣うような眼差し。伸ばされた手・・・

目を閉じる。落ち着け。自分自身にそう言い聞かせる。

「・・・ひとがた、か」

ひとがた 人型。

そうだ。そうに違いない。

招獣に定型はない。カーライルのものは鳥形だし、他にも獅子や竜を思わせる招獣の例がある。人の形をしたものがあつてもおかしくはない筈だ。

「あれは、おそらく、人型の招獣だ。人間ではない。それだけは分かる」

「いましてがたの、少年がですか？」

信じられない、といった表情だ。イリユーシャは眉根を寄せる。信じがたいのはイリユーシャとて同じだ。

「・・・人間であるならば、この世界の者であるならば、相応の匂いがする。あれは兄上の『焰』と同じ匂いがした。この世のものとは、一線を画する異質な・・・異界の匂い、とでもいおうか」

魔道の才を多少なりとも磨いた者ならば、誰もが感じるはずだ。

初めて異母兄の 招獣に会つた時と同等の違和感。感じた事のない

空気。その感覚を知らぬ者ならば、招獣に結びつける事はないかもしれないが、自分は既にそれを経験している。

「だから、あれは人間の姿をした招獣・・・そう、解釈するしかない」

自分自身に言い聞かせるような口調だった。

虚脱感が波のように襲う。あれがもし招獣であったとすれば、自分は千歳一隅の機会を逃したことになる。あともう一步という所までようやく漕ぎつけたというのに、事もあろうに己の失態で全てをふいにしてしまうとは。

ともすれば小刻みに震える腕を睨みやり、イリユーシャは拳を握り締めた。さらに力を込めると、震えは止まった。

この疲労、何かがごっそりと体から抜き取られたような、今も抜き取られ続けているような感覚は失血のせいか、それとも禁術の代償か。そうでなくとも招獣は術者の生命力を奪う。召還するだけならいざ知らず、禁術まで使って寿命まで縮めたのだから、相応の負担が体にかかったのだらう。もっとも仮に召還を成功したところで、主人の精を糧とする招獣を使役する限り、生命力は奪われ続けるわけなのだが・・・

そこで、一つの可能性に突き当たって、イリユーシャは戦慄した。

招獣を使役する限り、生命力は奪われ続ける？

招獣を使役する限り・・・招獣がいる限り・・・

その可能性にたどり着いた時、イリユーシャは動悸が早くなるのを自覚した。

しばし目を閉じて動揺が収まるのを待った。息を長く吸って、長く吐く。心を平らに、感覚を研ぎ澄ます。どんな魔道にも通じる心得だ。

「・・・感じる・・・やはり、感じる。つながっている・・・」
声は興奮を隠しきれてはいなかった。イリユーシャは逸る心を押し留めつつ、さらに集中を深める。

微細な波動。それは、か細い糸に似ていた。

自分と相手を繋ぐ糸を掬い取り、手繰り寄せる。
そして

「とにかくも、今は御安静に。魔術がどれほど術者の体を消耗させるのかは存じませんが、今のイリユーシャ様には明らかに休息が必要ですよ」

「・・・じゃない」

イリユーシャは手当てを施すシンハの腕を振り払い、立ち上がる。
真新しい包帯が床を転々と舞った。

「術は失敗していない」

「どういう事ですか？」

「あれはまだこの世界にいる・・・しかも、すぐそこに」

第二話 招聘 (2)

日没。

斜陽が噴水にたつ白亜の獅子を黄金に染め、樹木の陰はいよいよ長い。剪定にいそしむ庭師の姿や別館と本館を往来する侍女達の姦しい雑談が、中庭を彩り、平穩を絵に描いたような光景だった。

中空に忽然と現れたそれは重力にしたがつて中庭の噴水に落下した。派手な音と共に、水しぶきが撒き散らされた。飛び立つ鳥の羽音がそれに続く。

丁度、付近にいた侍女数名は、何事かと変事に目をむけた。

水中と水面を行き来してもがくものが、生物であることはまず間違いはなく思われた。跳ね上がる水しぶきで、判然としなかったが、人間並みの大きさだ。

子供の肩くらの水位である。それはやがて噴水の縁石に手をかけて、上半身を水面からのぞかせた。水を飲んでしまったのか、体をくの字に曲げて、激しく咳き込んでいる。濡れそぼった体から水の飛沫が勢いよく飛んだ。

「…人間？」

息をつめて注視していた侍女達の一人が呟いた。

水から這いでて、石畳に座りこむと、その人間は彼女達に気づいたようで、濃い色の目を大きく見開いた。侍女達が黒色の瞳を目にするのはこれが初めてだった。

子供と形容するほうが妥当な年の頃だ。その顔立ちと成長途上の体。遠目からは、性別が判然としないが、髪が短いのを見ると、恐らくは少年であるようだ。

少年の風貌は束の間、彼女達を安堵させたが、警戒心が消えたわけではない。危険性ともかく侵入者であることは一目瞭然であり、放置する訳にもいかなかった。

三人の内、年長の侍女が二人に囁いた。

「衛兵を呼んでください。今すぐに」

それを気に硬直がとけ、はじめられたように二人は踵をかえして駆け出した。残った年長の侍女は侵入者に対峙した。

「お前は何者？ どこから入りこんだの？」

少年は答えなかった。のろのろと起き上がり、前のめりに、たたらを踏む。反射的に侍女は一步あとずさった。

「寄らないで！」

びくり、と少年の動きが止まり、戸惑いがちな表情で立ち尽くす。まさか本当に静止するとは思わなかった侍女は脱力を禁じえなかった。

「答えなさい。お前はどこから来たの」

その時、少年の上衣を染める赤いものに気づいた。柄ではなく染みのようなものが、この世の物とは思えぬ程白い生地に点在している。それが何であるか考え、答えに行き当たった時、侍女は戦慄した。

負傷。でなければ返り血。どちらにしる穩やかではない。

「その血は……」

少年は初めて気づいたとでもいう様に、自分の襟下に目をやり顔を強張らせる。あせったように視線が辺りをさまよい、最後に侍女に戻った。

「……だれ？」

それが少年の発した最初の言葉だった。

「そう、お前は誰かと聞いているの」

「……あなたは？」

装っている風には見えない。心神喪失者か、知能に問題があるのか。だとすれば不幸なことだが。

どこからか紛れ込んできたのだろうか。

「ここはどこですか？」

おずおずと周囲を見回す。その様子はいっそ無防備なほどで、侍女をためらわせた。なによりも相手は自分より年下の、見るからに

非力そうな少年だ。

「…正直に話せば、悪いようにはならないわ。この館の主人は寛大な方だから」

少年が感銘を受けた様子はなかった。ただ何か、言葉に詰まったように表情に困惑を深めただけだった。

「僕は・・・」

侍女がその言葉の続きを聞く事はなかった。侵入者の報を受けた衛兵達が駆けつけてきたのだった。

第二話 招聘 (3)

現状を把握するよりも早く、ナリタカは男達に取り押さえられた。一言半句たりとも発せず、職業的な簡潔さをもってナリタカを地面に引き倒し、その手首をつかんで後ろ手に捻り上げ、顔を地べたに押さえつけた拳句、首に槍の刃をあてがう。

ひやり、とした感触が斜めに首筋をつたい、ナリタカは抵抗をやめた。彼等はナリタカを無力化した事を確認すると、ようやく口を開いた。

「貴様は何者だ。どこから忍び込んできた」

先ほどの少女と同じ質問だった。同じように警戒心もあらわな、自分を有害な不審人物と断定している口調。違うのは答えなければ何をするのか分からないという剣呑な態度だけだ。

「違う」

何が違うのか自分でも分からないままにナリタカはうめいた。

ここはどこだ？ この連中は何だ？

ただっ広い公園のような場所。メイド服のような奇妙な格好をした女性。薄い色の髪と目。その彫りの深い顔立ちに穿たれたガラス玉のような瞳。向けられる視線。誰何。悲鳴。罵声。

ただ、身じろぎする度に皮膚をはむ刃の感触だけが、危地の真まことをこの上なく明瞭に伝えていた。それは、包丁やジャックナイフや、ナリタカの身近にあった刃物とは違う、人を殺すためだけに研がれた武器だった。

刃物を喉元につけつけられると、動く事はおろか呼吸さえままならなくなるのだという事を、ナリタカはこの時はじめて知った。

「答える！」

男はナリタカの手首を更に捻りあげ、その肘を無理矢理伸ばして、腕をじりじりと上へ押し上げる。肩の関節に急激な負荷がかかる。自分の口からほとばしる悲鳴と共に、ゴキ、という不吉な音を聞い

た。

悶絶する。のけぞった拍子に首筋に刃が食い込み血を吹いたが、肩の疼痛がそれを圧した。焼け付くように痛い。全身から汗が吹きでた。

「やめろっ！」

その声は男達のものではなく、また自分を最初に問い質そうとした女性のもでもなかった。気絶しそうな痛みの中で、ナリタカを冷静に見下ろす、もう一人のナリタカがそう判断する。

「これは、殿下っ」

ナリタカを拘束する一人を残して、男達は飛びすさって姿勢を正す。地に肩膝をつき、右手を胸に当て、頭をたれる。ナリタカの首にあてがわれていた刃も除かれた。

「その者を放してやれ」

その口調に、奇妙な違和感を感じた。

怒鳴っている訳でも、それどころか強く言っているわけでもないのに、ただ何か抗い難い微妙な威圧感を感じさせる声音。

命令と言えば、それはまごうことなき命令であったが、ナリタカがこれまで聞いてきた、生徒への媚をぬぐいきれない教師達のものとも、大人が激昂した時に放つ虚勢とも異なる、ナリタカがこれまで聞いた事のない類のものだった。

相手が自分の意に従うことを微塵もうたがわない、彼我に横たわる上下関係を一瞬にして知らしめる、そんな物言いがこの世にあるのだということ、それまでナリタカは知らなかった。

無骨な手の下で視線だけを声の方向にやった。

一様に膝をついた男達の先に、立っている二人の人間。一人は青年で、もう一人は少女。二人とも他の人間に劣らず、珍妙な衣装に身を包んでいる。

「しかし殿下、この者は……」

「危険はない。多少、不幸な行き違いがあったようだな。放してやれ」

「はっ」

急に自由になった体をもてあましてナリタカは地面に突っ伏した。拘束と一緒に緊張まで解けたように、痛みと目眩が襲ってきて頭がぐらついた。

なんとか体を起こすと、だらり、と垂れ下がった自分の右腕に気づいた。痛覚はあるが力が入らない。動かそうとしても動かない。

「肩を外されたか」

顔を上げると、例の声の主が立っていた。「殿下」と呼ばれ、筋骨たくましい男達に跪かれているのは、どう見ても、まだ十代半ばと知れる少女だった。

「申し訳ありません。よもや、殿下ゆかりの者とは露とも存じず……」

「お前達に伝えておかなかった私にも非はある。気にするな」
少女はこともなげにそういつて、「シンハ」と傍らに立つ青年に一瞥を向けた。小さく頷いた青年が進み出てナリタカの前に膝をつく。

無表情な青年だった。苦痛に歪んだナリタカの様子など一顧だにせず、不気味に垂れ下がった腕にさわる。患部を触診するように指を這わせ「手や肘は動くか」などと聞いてくる。

しばらくすると背後の少女に報告した。

「大した事はありません。簡単に治せるとは思いますが…彼、が相手では、いささか勝手が違う可能性もあります」

「分かっている。しかし、たかが脱臼だ。多少間違った所で大事はない」

訳の分からないやりとりの末に、青年は少女の承諾を得てナリタカの処置をはじめた。

ナリタカを噴水の側まで連れていき、その縁石を背もたれにナリタカを座らせた。どうやら体を固定するためらしい。青年は右手でナリタカの手首を、左手で肘をつかんで言った。

「体から力を抜け。呼吸を整えろ」

いい終えるや、ほぼ直角に曲げられたナリタカの腕を、内側に、ナリタカの胸壁に押し付け、一気に下に引っ張る。そこから肘を支点に、肘より先を小さく外に回す。

その動作が幾度か繰り返された。一回、三四秒ほどの周期だ。流れるような動きは早く痛みも少なかった。

ついに外れた時と同じ、ゴキ、という音がして、いままでの苦痛が嘘のように痛みが消えた。

「整復は終わったが、慢性化しないためにも、しばらくは右肩を出来るだけ動かさない方がいい」

事務的にやるべき事をやり終えたといった感じで、青年は少女の傍らに戻る。

礼を述べたほうがいいのだろうか、という場違いな発想が生まれるが、相手の態度はそんな当たり前のやりとりを挟む余地もないほど、事務的だった。

苦痛が消え全身を濡らす汗が冷えはじめるときには、流石にこの異常事態についてナリタカは考え始めていた。

青年も少女も、誰も彼も、この場にいる人間すべて何かがおかしい。第一、彼等の容姿は、どう逆立ちしても日本人のものではない。外人。いや、白人？

少女の髪だけは、顔立ちに似合わず黒いが、他の人間は金と茶のバリエーションだ。それに瞳の色は青や緑と、みな淡い。

髪と目の色、顔立ち、服装、立ち振る舞い、それに言葉づかい。何もかもが、ナリタカが生まれてこのかた慣れ親しんで来た世界のものではない。

そして、それは人間ばかりではなく、この西洋趣味の庭園にも言える事だ。石造りの噴水も、その中央に立つ獅子の彫像も、広がりを持った空間の奥行きも、日本というよりはまるでイギリスの貴族の庭園だ。

それでいて彼等の衣装は、ヨーロッパの貴族というよりは、むしろギリシアの民族衣装に似ていた。

ちぐはぐだ、との感想を覚えてから気付く。この場にそぐわないのは、彼等ではなく、むしろナリタカの方なのだ。

自分は一体、どうして…？

気づけば溺れそうになっていた。必死に這い出してみればこの場所、奇妙な格好をした外人の女性ないし少女達の驚愕と警戒の眼差し、かみ合わない会話、凶器を携えて駆けつけてきた男達。不合理的な暴力。

鍵は一連の出来事以前にあると分かっていたが、問題はその思い出すという作業だった。

断片化された記憶。時系列順に辿れない。混乱している。それは、普段は整理されたファイルが何かの拍子に混ざってしまっただけで順番が分からなくなってしまうのに似ていた。

「どうした？面を上げる」

思考を中断され、ナリタカは言われるままに顔を上げた。自分を見下ろす少女もやはり異国的な容貌をあらわしている。

磁器を思わせる白い肌、西洋の中に東洋をうかがわせる目鼻立ち、青みがかかった直ぐな黒髪、すんなりと伸びた体軀。美しいという形容が似合う人間は世に少ないが、この少女は十分それに値する。

しかし同年代の美しい少女を見た時の心の動きは皆無だった。むしろ恐いとすら感じた。状況の異常性もあるだろうが、決してそれだけではない。

見つめられるとそらせない射るような碧眼。そこに浮かぶ光は、他の一切の造形美を裏切るように、冷たく、鋭く、ナリタカを睥睨^{へいげい}する。なぜだが見覚えがあるような気がしたが、こん印象的な目を一度でも見て、忘れられるとは思えなかった。

少女の視線が観察するようにナリタカをなぞる。それを隠そうともしない無遠慮な態度に、不快感と居心地の悪さを覚える。

ふと、その視線がナリタカの首筋に止まった。

「お前でも血を流すのか」

槍の刃で切った部分だ。出血はもう止まっている。

「お前の名は？」

尋ねたのではない。男達に命令した時と変わらない口調で、少女はナリタカの名前を求めたのだった。

「…成隆。相馬成隆」

「ソーマ？それが、名か？」

「成隆が名前で、相馬が姓です」

「ではナリタカ」少女は続けた。「お前はなぜ自分がここにいるか分かっているのか？」

首を振った。

「…そうか」

失望に似た色合いが少女の面をかすめた。思えば最初から彼女の表情は明るくなかった。顔色もあまり良くない。

「それを知りたいのなら、私と共に来るがいい」

その言葉の信憑性を信じたわけではなかったが、他にどうすればいいのかも分からず、ただ黙っていた。

少女は控えていた男達に向き直った。

「お前達には面倒をかけた。すまなかったな。以後こういう事はないように気をつける…下がってよい」

彼等はひたすら恐縮して、下げた頭をますます低くした。

「アリシア」と、今度は呆然と一部始終を見ていたメイド服の女性に声をかける。最初にナリタカに質問をあびせかけてきた女性である。

「ご苦労だった。仔細はのちほど聞かせてもらう。とりあえず、これの手当てと着替えを頼む」

これ、とはどうやら自分の事らしい。

「終わりしだい、部屋に連れて来てくれ」少し間があつて付け加える。「茶の用意も頼みたい。そうだな、東方産のものがこの間入つただろう。後で一緒に持ってきてくれ」

こうして関わった者誰一人として納得のゆかぬまま、太陽は木々の間に没し夜が訪れようとしていた。

第三話 世界 (1)

頭痛がするのは、きっと傷のせいばかりではないだろう。本当は思いつくまでもない事だった。

相馬成隆は、廃ビルの屋上から飛び降りて自殺した。約九十メートルの高所から、アスファルトの地面に叩き付けられて、死なずにいるのは、たとえ猫にだって無理だ。

なら、ここにいる僕は誰だ？

悪寒を感じて身震いをする、手当をしてくれていた女性が手を止めた。確かそう、アリシアという名前の金髪碧眼の女性。

「すみません。痛みますか？」

僕は自殺した。自殺した、はずだ。ならば、どうしてこんな訳の分からぬ場所で見知らぬ女性に傷の手当をされているのか。その傷をつけられた理由も、良くは分からぬもまま。

頭が痛い。どうして、なんで、どうやって。ありとあらゆる疑問形が、まともな質問の形をなさないまま思考を埋め尽くし、氾濫する。

「…あの、大丈夫ですか？ 顔色が」

伸ばされた指には、体温があつて、手触りがあつて、現実の感触があつた。暖かい人肌の温もりには今は冷や汗がでる。いや、脂汗だ。彼女の手を逃れるように、ナリタカは身を引き、顔を伏せた。

「あの、ナリタカ様？」
顔を上げる。

歪みそうになる表情を必死に押さえながら、可能な限り冷静に尋ねた。

「ここは、どこですか？」

「…皇女殿下のお屋敷ですが」

答えになっていない答え。皇女、殿下、その屋敷。いつの時代の

どこの場所の話をしているのだろう。時代錯誤、いや文化錯誤か。

ここは日本ではないのか？それとも、日本どころか……ある予想が胸をかすめるが、そんな発想を認めるのはナリタカのなけなしの矜持が許さなかった。そんな、馬鹿馬鹿しい、幼稚な発想は。

「地図：そう、地図でいうと」

なおも食い下がる自分の姿は、アリシアから見れば、さぞ奇妙に見えたことだろう。屋敷の主人に招かれたはずなのに、ここはここだと騒ぎ立てる客人など、ついで迎えた事がなかったに違いなかったらうから。

実際の話、現在地を把握して、どうしようという明確な展望はなかったが、とにかくその時は聞かすにはいられなかった。日本地図の、いや世界地図のどこかを指し示してもらえれば、それで少しは安心できると思ったのかもしれない。

足元が、がらがらと音立てて崩れ去っていくような焦燥の中で、ただひたすら何らかの足がかりを求めていた。

「ベルグです。あの、レソト半島の」

アリシアは怪訝そうな顔を浮かべながらも、ナリタカの質問に素直に応じた。気遣うような視線がナリタカに向けられる。

ナリタカは条件反射的に、視線をそらす。こういう視線が苦手だった事を思い出す。相手を案じる善意の視線。その善意を信じて、疑わない者の目。

「ベルグ？ レソト？」

反芻しても、まるで親近感のわからない地名だった。だというのに、まるでこちらの地理の常識を疑うように、アリシアはナリタカを気づかし気に見るのだった。

ひるみを押して、重ねて問う。

「…それは、どの大陸にあるんですか？」

アリシアは数秒の沈黙の後、探るような表情を浮かべた。

「からかってらっしゃるんですか？ それともひょっとして何かの謎かけ？」

謎掛け。確かに、これは壮大な謎掛けだ。ただし謎をかけられているのはこちらの方だ。

「……そうじゃなくて」

さらに質問を放とうと口を開くが、結局、何も出てこなかった。焦燥が膨れ上がる。形のない、不定形の焦慮。

ひたひたと足音が聞こえる。何か怖いものが追いかけてくるような、それなのに、どこにも活路を見出せない。足音が次第に大きくなっていく。

逃げなければ。そう思うのに、何から逃げなければいけないのか、どこへ逃げればいいのか、分からない。

「そろそろ支度をなさらなければ。お湯も冷めてしまう事ですし」目の前の笑みがうらめしい。ナリタカの切迫はアリシアには届かない。

どうしたら自分の窮状を理解してもらえらるうか、とナリタカは頭をめぐらす。論理的に説明しなければ、きっと理解してはもらえない。

だが、ならどう説明したらいい？

自殺するために屋上から飛び降りたはいいものの、目覚めたら噴水の中で、這い出したら見覚えがないどころか、ナリタカの常識をいちじるしく逸脱した奇妙奇天烈な場所であり、あなたもまたその住人の一人なのだと、一体どう言ったら分かってもらえる？

分かってもらえないさ、と内なる声が囁く。

もらえやしないって事をお前はすでに薄々感じている。ただ再確認するのが怖いだけだ。

第一、とそれは笑った。

いまさら現在地を確認してどうなるんだ。それとも、ここいらで一番高い建物はどこですかって、聞くつもりか？ もう一度、死に直すためにさ。

追いつかれた、と感じた瞬間。何かが凝って黒い塊になり、ナリタカの中に、すくと落ちた。

お前は死ねなかった。

宣告は、まるで嵐の後の静けさだった。方々に吹き荒れていた雑念が一瞬にして払われ、最後に残ったそれだけが、正面きつての対峙をナリタカに迫った。

（僕は死ねなかった）

それは全ての思考の前提として、そこにありながら、意識的に焦点を当てる事を避けていた命題だった。

（どうして？）

死んでない。死ななかった。死ねなかった。吐き気も、傷の痛みも、この唾棄すべき思考も、みな自分がまだ生き長らえているという証明。

「…ナリタカ様、あの、泣いていらつしやるのですか？」

伸びてくるアリシアの手から逃れるようにナリタカは身をひき、体をくの字に曲げた。両の掌で顔を覆い、こみ上げてくる嗚咽をこらえた。息もせず、せりあがってくる何かを呑み込み、呑み下し、何度もそれを繰り返す。

「ナリタカ様」

相手が自分の目線の位置にしゃがんだことが気配で分かった。劣るようなその声が、癪に障る。

うるさい。あんたは何だ。あんたなんか知らない。あの庭であった連中も、あの少女も、あの青年も、自分を押さえつけた男達も、誰一人だって知りやしない。こんな場所、知らない。

「大丈夫です」

何が大丈夫だというのか。

アリシアの両腕は、全身で拒絶を露にするナリタカの体を抱き取り、抱きしめる。ナリタカの僅かな抵抗は、その柔らかい抱擁の中にかからめとられた。

「大丈夫です。涙を流すのは、恥ずべき事でも隠すべき事でもありません。だから、こらえる必要はないんです」

慰めがかえって心を波立たせる。わずらわしい。余計に惨めにな

る。

初対面の相手の前で涙を流している自分がひどく滑稽に思えて、ナリタカは更に背中を深く丸めた。

「もう大丈夫です。何の心配もいりません。ここにはあなたを傷つける人はいないし、もし万が一そんな事があつたとしても、私がきつと守って差し上げますから」

脈絡のない、無駄に優しい声が、心の亀裂を押し広げ、かき乱す。

「なにか、辛い思いをなさったんですね」

黙れ。あなたに何が分かる。何も分かっていないくせに。何も知らないくせに。出て行ってくれ。見ないでくれ。頼むから、一人にさせてくれ。

そう言いたいのにも、口を開けるたび言わんとする言葉は、喉を震わせる、すすり泣きに掻き消されるのだった。

「大丈夫です」

泣いている間中、耳元で、ずっとアリシアの声がしていた。

第三話 世界 (2)

招じ入れられた部屋は、ナリタカがこれまで入ったどんな部屋よりも大きく、豪華だった。

見上げるほど、高い天井。色鮮やかなステンドグラスはその中天を飾り、日中ならば光は虹色に透過して床に降り注ぐ事だろう。重厚な調度の数々は、品格を感じさせ、どっしりと存在感があり、ナリタカの知る狭小なスペースに押し込めるための小作りの家具とは、全くの別物だった。白い格子の埋め込まれた巨大な窓は、畳に換算したら六畳ぐらいにはなるだろうか。部屋の壁面には、雄大に暖炉が掘り込まれている。もとより、暖炉などという代物は日本の住宅では滅多に御眼にかかれない。まるで、ヨーロッパかどこかの貴族の住まいだ。

「どうした？座れ」

目を見開いて、頭をめぐらすナリタカに、少女は花模様のソファを指し示した。当人は既に、その向かいに悠然と足を組んで座っている。背後にいたアリシアに小声でせつつかれ、ナリタカはようやく腰を下ろす。腰を下ろしてしばらく、自分と少女は座っているのに、アリシアと少女の脇に控える青年とが立つたままでいることに気がついた。碧眼の少女は、それを斟酌する風も なく、左手を肘掛に乗せ、右手で優雅な流線形を描くティーカップの取手を弄んでいる。

勧められるままに、ナリタカは目前に注がれた透明感のある橙色の液体に口をつける。別段、紅茶に詳しいわけではないが、今まで飲んだ紅茶とは少々違う、癖のある風味だ。紅茶というよりは、むしろ日本茶や中国茶に似ているかもしれない。

「着替えたのだな」

少女が言った。自分が命じたことを忘れたとでもいうのだろうか。

「そうしていると、そこいらの子供と、どこも変わらないように見えるな」

没収された学生服の代わりに与えられた服は、白を基調にした上と貫頭衣に似たベスト、それらを上から一くくりにする幅広の帯だった。金糸で縫い取られた意匠といい異国情緒たつぷりのデザインだったが、とりあえず、着脱に不安を覚えるような形状ではない。「アリシア、ご苦労だった」

それは、下がれ、と命令するのと同義であったのだろうか。アリシアは好奇と気がかりとを含ませた一瞥をナリタカにくれた後、一礼して退出する。扉が閉まる重々しい音の後に残ったのは、ナリタカと、少女と、青年との三人だった。

「単刀直入に言おう」

ティーカップをそろいの受皿に戻し、少女が口を開いた。話す時にこちらの目を真つ直ぐに見るのは外国人の流儀だろうか。どうにも落ち着かない気分させられる。

「私の名は、イリユーシャ・フォン・リーエンヴァイン。ラトギアの皇女であり、お前の主人だ」

どう反応していいのか分からなかった。

「……え、と。あなたの名前が……イリユーシャ、フォ……」

「無礼者！」鋭い一喝が、それ以上を遮った。それまで直立不動で少女の脇に突っ立っていた青年だった。

「分をわきまえよ、この方はお前ごときが軽々しく御名を口にしておいてよい方では……」

無口だとばかり思っていた青年の剣幕に呑まれていると、イリユーシャなる少女が片手を挙げて青年を黙らせた。

「些事だ。どうでもいいし、話が進まん。好きなように呼ばせる」

「しかし、殿下。他の者に示しがつきません」

「むろん、内輪での話だ。ここには、お前しかいないのだから、そうツンケンすることもないだろう」

「……ツンケン」

青年はそれきり、口をつぐんだ。

「ナリタカ、この者はシンハヴァイン・エトキアという。以後、接する機会も多いと思うので、仲良くしてやってくれ」

相手が仲良くしたがっているようには見えなかったが、とりあえずナリタカは小さく頭を下げた。今度は不用意に相手の名を反芻する真似は避けた。

「時に、お前……ナリタカと言ったか。何が出来る？」

「は？」

「お前の能力は何だ、と聞いている」

「能力？」

言及されているのは、成績が中の上だとか、そういう事ではなさそうだった。

「口から火を吐いたり、空を飛べるとか……」

「……いえ」

自分は奇術師ではない。

「武道はどうだ？剣は使えるか？」

「……剣道はやったことがありますけど。一体、何なんですか？この質問に、何か意味でも……」

「では、魔術はどうだ？」

もはや、どう反応していいのか分からない。

「ここは一体どの国ですか？ひよつとして、外国ですか？」

今更、ひよつとしても何も無いが、とりあえず聞く他はない。

「ここが、どの国かと問われれば、ベルグと答えるしかない」
それに類する答えはすでに、あのアリシアから聞かされていた。
どうやら、ベルグというのは国の名前であるらしかった。

「ベルグ、つまり、レソト半島の付け根の北東に当たる部分。もつとも、お前にとっては異世界という答えのほうが妥当か」

「イセカイ？」

そして、少女は語りだした。その話を要約するならば、大体、次

の一文になる。

曰く、ナリタカはこの世界に招獣という存在として召還され、イリユーシャという主人の命ずるままに使役される定めである。

ある意味、少女の説明は分かりやすく簡潔で、要点を抑えたものだったが、ナリタカを置き去りにした感は否めない。

「はあ」我ながら気の抜けた返事だった。「そうですね」

その語調はやはり誠意を欠いていたのか、少女はまるでナリタカが異議でも申し立てたかのように、反応する。

「お前は異世界から呼び寄せられた使役獣、招獣で、私がその喚び手だ。これ以上、明瞭な説明もなかるう」

「つまり、あなたが言いたいのは、僕が、その、魔法によって、ここに連れてこられたと、そういうことですか？」

「魔法ではない。魔術だ」

出来の悪い冗談を聞いたように、しらけた気分だった。そう、これは確かに壮大に出来のわるい冗談だ。自分の身に起こったことも、この少女のいう事も、何もかもが、まるで三文小説のように、粗悪で、薄っぺらく、反吐が出るような趣味の悪さだ。自分が費やした三ヶ月という時間、葛藤、決意。その全てが、変わり果てた姿でそこにある。切実だった何かに、最悪の形で泥をかけられたような、胸糞の悪さだ。

「そうですね。魔術ですか」ぬるく、ナリタカは微笑った。「では、なんでさつき出会ったばかりの人間が異世界人だと、ここが僕にとつての異世界だと、そういう結論に達するんですか？それも、やはり、魔術とやらの為せる技ですか」

「お前が人間の姿をしているという事に関しては、こちらが問いつめる筋だと思ったんだがな。そう来たか」

「人間の姿、ですか？まるで、僕が人間の姿をしている事が不満みたいな言い方ですね。僕だって、ここにペガサスやらグリフィンやらが飛び回っていれば、ここが異世界だとすんなり納得できるかもしれませんけど」

少女が冗談を言っているようには見えない。それに、冗談にしては少しばかり出来が悪すぎる。だとすれば残された可能性としては虚言癖か妄想癖と相場は決まってるが、そんなことはどうでもいい。ただ、自分はどうしようもない苛立ちの矛先を求めているだけだ。信じるとか信じないとか、そんな次元の話じゃない。異世界云々の戯言ももうたくさんだ。ただ、この、足元から何かが崩れていくような感覚が気持ち悪い。頭がぐらぐらする。何かを考えていなければ、しゃべっていなければ、気がおかしくなってしまうそうだ。

「では、おまえは己が異世界から来た事すら認めぬというのか」

「認めるも何も・・・」声はヒステリックに歪む。「それは、建物とか服とか、日本の標準から外れていますけど、あくまで基本的な所は何も変わらない。空気だって、植物だって、空の色だって僕の知っている世界と、とりたてて変わっては見えない。何も、それらしい証拠が見当たらない以上、普通は世界じゃなく、あなたの精神の方を疑います」

少女、ことイリユーシャ・フォン・リーエンウ、アイン皇女は、苛立たし気な溜め息を吐いた。

「ナリタカ・ソーマ、私は真面目な話をしている。お前がこれ以上、ふざけた態度を長引かせるなら、こちらにも相応の対処の仕方というものがある」

恫喝が様になる十代というのは、中々いるものではない。やはり、狂人のなせる技か。

「対処。どんな対処ですか。そもそも、僕をここに連れて来たのはあなた達でしょう。どう考えたってふざけているのはそっちじゃないですか。言ってみれば、犯罪ですよ。それとも何ですか？対処っていうのは、僕を元いた場所に返すことですか」

いわゆる正論をいっているつもりだったが、口に出すと、その言葉はひどく場違いに、滑稽に聞こえた。

「それは出来ない」皮肉が通じたの通じていないのか。「召還は不可逆性の魔道でな。つまり、一方通行なんだ。召還は出来ても帰

す方法など知らない。第一、術士にとって招獣を元の世界に返すメ
リットなどない」

それは何よりだ。戻りたい訳ではない。ここにいたいわけではな
いが、元いた場所に帰りたいわけでもない。

「それで、あなたの言っている事を僕が額面通りに受け取るべき
理由が何かあるんですか」

「お前は何か勘違いをしているようだ。お前が信じるか信じない
かはこちらの知った事ではない。懇切丁寧に説明して納得してもら
う必要もない」

先程の「対処」発言と合わせて考える時、実力行使を示唆してい
ると考えるべきだろうか。

「第一、この世界とお前の世界の差異など知らぬ私が、どうして
一例をあげてお前を納得させることが出来る？むしろ、そのような
違いを指摘出来たなら、それこそお前が考えているように私が何ら
かの詐欺を働いていることの証左にはならないか？」

言葉遊びじみた話よりも、むしろそれに続いて、うそぶくように
言った言葉こそが、ナリタカの注意を捕らえた。

「だいたい、言葉を発する招獣自体が前例のないことなんだ。あ
まつさえ、主人に向かって口答えするなど考えもしなかった」

「・・・言葉？」

イリユーシャは恐らく何の気なしにそういったのだろう。しかし、
それはナリタカをして、一つの事実を気づかしめた。とっくに気付
いて然るべきであった、その事実。

自分は、この見るからに言葉の通じなさそうな連中相手にずっと
会話をしている。

目眩がした。

自分が話しているこの言葉はなんだ？

それは日本語ではなく、かといって片言しか分からぬ英語でもな
く、その二つでないとしたら、ナリタカにとっては不可知の言語で
ある。にも関わらず・・・

「僕はこの言葉を、この言語を話している」

自分の口から滑りてた言葉の響きが、ナリタカの動揺を深めた。まるで産まれてからずっと使ってきた母国語のように、いや、ある意味それ以上に、それらの言葉は、喉の奥から、舌の先から、流れ出た。音節やトーンは耳にしっくりと馴染んで、考える間もなく理解され、その違和感のなさが、底知れぬ違和感となってナリタカにのしかかる。

「お前が話しているのは、セル語だ。お前の国でもセル語が話されているのか？」

ひどい酩酊に似た目眩が、ナリタカをよろめかせた。立っていらねずに、ソファに逆戻りする。

さまよった視線の先、紗のカーテンの間に月があった。

「・・・そんな」

空に浮かぶ巨大な一つ目が、赤銅に色づいてナリタカを見返していた。それは確かに、月と呼ぶべき天空を司る夜の支配者ではあったが、同時にナリタカの知る月ではなかった。

ナリタカがこれまで見たどんな夜の月よりも、数倍は大きい。地平線ちかくの対象物との比較にともなう目の錯覚などでは、断じて有り得ないサイズだった。

満月を幾日か過ぎただろう歪な円盤は、その尋常ならざる巨体でもって、ナリタカに知らしめた。

「ここは異世界なのだ、と。」

第四話 証明

「なぜだっ、なぜあんなものが出てくるっ！」

卓子に叩き付けられた拳は白い。陶磁の茶器の震えが収まるまでしばらくかかった。

あれでも、とシンハは先ほどのやり取りを思い出す。ナリタカと名乗った招獣の前では冷静を装っていたようだ。その退室と同時にたがが外れたように怒りが表面化した。

「たかだか衛兵数人を相手に、なんなく取り押えられ、肩を外された拳句に悲鳴まであげる始末……あんなものが招獣だともいうのかっ！」

イリユーシャの気性は激しい。人前ではそれを隠す事を知っていたが、九年来の付き合いともなれば、良くも悪くも遠慮がない。

しかし、無理もないと思う。文字通り血の滲むような思いをして、数々の失敗と執念の果てに、ようやく召還に成功したと喜んだのは束の間、肝心の招獣がアレでは平静を保てというほうが難しい。人間の姿をしたものが招獣として召還される事自体、魔術史上、類例をみない珍事であるらいが、仮に人型であったとしても屈強な戦士や老練な魔術師や、せめて普通の成年男子であれば多少なりとも救われたというものだ。

もつとも、それもイリユーシャの召還したものがまごうことなく招獣だと仮定した場合だ。疑問は残る。アレは本当に招獣なのか、という疑問。恐らくはイリユーシャ自身が一番痛切にその答えを求めている。

「話してみれば、やれ、ここはどこだ、お前は誰だ、だのと埒もあかぬ戯言ばかり。飲み込みも悪ければ、人の話を聞く気もないとしか思えない。加えて、あの細い腕や女だか男だか分からない軟弱な顔つきはなんだ」

つい先刻まで彼が座っていた長椅子の上に視線をやって、シンハ

はあどけなさの残る少年の顔を脳裏に描き出した。

人間の子供・・・そうとしか言いようのない外見と、それを裏切らない内面が切羽詰まった様子を通して見え隠れしていた。怒り、わめき、取り乱す様を一つ一つ、つぶさに観察するにつけ、彼が単に模しているのではなく、正に人間そのものでしかない、という印象は余計に拭いがたくなっていった。擬態だとしたら大したものだし、しかし、「ナリタカ」の正体が何であれイリユーシャが彼を招獣と呼ぶ限り、シンハもそのように理解し、そういう前程を話を進める。しかし、それでも最低限の事は確認しておかねばならない。

「イリユーシャ様、あの少年」

「少年ではないっ、招獣だ」

鋭い一喝。振り払った鬢髪の奥から碧眼が、シンハを睨み上げる。久しぶりの八つ当りである。

「あの者は」シンハは静かに言い直す。「まるで己が異世界から故なく連れ去れただけの被害者・・・少なくとも彼の世界におけるただの人間だともいいただけでした」

「だから、どうした！？人間だろうと、化け物だろうと、招獣として万人に認めさせるに不足のない力を持ち合わせていれば構わない」

そして、その力を持ち合わせていないのでは、という危惧は現物を見た者だれもが共有する思いに違いない。接して、話して、その反応を推し量って、イリユーシャもシンハも彼が招獣に足る力の保持者との確信には程遠い。

「イリユーシャ様、仮にあの者を本国へ連れ帰るとして、彼が招獣であるという事を他のものが納得するでしょうか？一見したところ、魔道の素養のない私のような人間にとっては、当初身に着けていた奇妙な服装の他には、普通の少年のさして変わりないように思えます。外見にしても、黒い目に髪と言えば、ここいらでは目立つでしょうが、東方ではありふれた外見であると聞きます。招獣であるという事を識別しうる何物かをあの者が有しているのでしょうか」

素朴な疑問だ。人間の姿をした招獣など聞いたことがない。というより、誰もアレを見て、音に聞こえたラトギア皇家の招獣とは思わない。いや、思えない。今の段階では単にイリユーシャが一人で招獣だと騒いでいるにすぎないといってもいい。

「つまり、お前がいたいのは、私がどこぞの子供を捕まえてきて、これが招獣でござい、とばかりに披露している……そう思われないかということか？」

「平たく言えば、そういう事になります」

であれば、証明が必要である。教会と魔導師ギルドの承認を得て、イリユーシャの能力者としての存在価値を宮廷、ひいては国民に認められること、ないし認めさせる事が必要不可欠なのだ。それが叶わないとあれば、ナリタカの実体が真実どうであれ、召還を試みたそもそもの目的を達成することは夢のまた夢だ。

顔を上げると、怒りの波動は幾分か揺らいで、かわって苦々し気な色合いが見え隠れしていた。シンハは、自分の問いの答えが芳しくないことを知った。

溜め息とも深呼吸ともつかない呼気が室内に一つ落ちた。

「証拠か……」

皮肉なことだった。招獣は招獣で、ここが異世界である証明を求め、術使は術使で彼が招獣であることを証明する必要性に駆られている。

「招獣に定型はないことは先に話したな。この世界に属さない……それが招獣とただの使い魔を分ける条件の一つ。簡単にいえば、ナリタカの放つ生体エネルギーはこの世界に住むものとは種類が異なる。色で言えば見た事のない色……そう、自然界に存在しない青い薔薇のようなものだ……見るものが見れば少なくとも、何かがおかしいということは感知する。それを招獣だと特定するまでは叶わなくとも」

「では」

「魔術師に話をするならそれでもいい。しかし、招獣は異形の姿

と圧倒的な力をもつモノ・・・それが常識的な概念だ。大衆の欲する招獣の像だ。分かるか？学術的な分類がどうだとか生体エネルギーがこうだとか、そんな事を言っただって庶民や魔道の素養のない者にとっては、馬の耳に念仏だ」

シンハは自分の耳は果たして馬の耳であろうかと考えた。

「第一、厳密にいつて招獣が招獣であるための条件など、あるいはしない。まだ十分に検証されていない特殊魔道の中の血継能力の一つに過ぎない上、招獣は魔道的な存在である以上に宗教的な存在意義を持つ。教会にとっては神の奇跡の顕われであり、ラトギアにとっても建国伝説にも語り継がれる、国のシンボルだ。実際の所、シンハ、お前だつてあれがラトギアの守護獣だと思えるか？あれが自分の国の象徴だと？」

シンハは沈黙を持って答えに代えた。

「だが、まあ」

といつて、視線を窓際の卓の上、白い木綿の布の上に移す。

「これらが、異世界から来たと言ってもいいほど変わっているのは確かだがな」

白布の上には、生乾きの学生服一式、更にそのポケットに納められていたナリタカの所持品　シャーペン、消しゴム等　が奇麗に並べられていた。つい先ほどアリシアに持ってこさせたものだ。

イリユーシャは半袖の上衣をつまみ上げた。

「まず、この上衣の染料　純白だ。まるで雪で染め抜かれたかのような白。こんな色を自然界から抽出することは我々には出来ない」

服の形状もさることながら、確かにその色は本来有り得ない色だ。そろいの下衣は黒に限りなく近い濃紺だが、その色艶も普通に出回っている染料に出せるものとは思えなかった。

「加えて、これは腰に巻いていた所を見ると帯と見るのが妥当だが」そういつて、ベルトを取り上げる。「留め金のある帯だ。つま

り、ベルトという奴だ。素材や縫製、処理の仕方は素人目にも大したものだ。治金の技術は一驚に値する。しかもこれは」
そういつてきららかな金具の部分を指し示し、反対側を持って、鞭やフレイルの要領で振り回した。

「もしもの時には武器にもなりそうだ。護身用をかねているか？アレの住む世界は存外物騒と見える」

そうして、イリユーシャは一つ一つ、熱心に検分を続け、触り、掲げ、灯火に透かしたりしつつも未知の物質に対する自分なりの見解を述べていった。

だが、次第にその語調は尻すぼみになっていき、いつしか止まった。

「・・・シンハ、私は果たして正しい選択をしたのだろうか」
力ない、独白にも似た問いだった。

シンハは最初から召還を試みること自体、消極的だった。そして正直なところ召還に成功した今、振り出しに戻ったところか余計厄介事が増えたように思える。無論、吉とでるか凶とでるか、まだ決まった訳ではないのだが。

しかし、自分の意見は重要ではない。

己の見解は、イリユーシャの判断材料以上のものではない。シンハはそう自分に任じている。

「イリユーシャ様の選択は、私にとって唯一の選択です」
イリユーシャは複雑な表情を浮かべた。

むろん、彼女の欲する答えは分かっている。決意を持って望んだとしても、人は時に迷う。

あれで、良かったのか。本当にそれしか道はなかったのか。最善の選択だったかどうか・・・等等、今更どうなるものでもないのに、人は己に問い、他者に問い、そしてその実それは問いではなく、確認なのだ。誰でもいい。追認して欲しいのだ。自分が本当に正しかったという事を承認して欲しい・・・迷えば、迷うほど、その役目を他者に強要する。

そして、その役目をシン八は引き受けるつもりはなかった。年若い、子供といつてもいい目前の主人を甘やかすのは簡単だった。親族の少女に対するように、接する事が出来るのなら、シン八とてそうしたかった。

守り、甘やかし、自分の庇護化におけるものなら、そうしていたかもしれない。だが、そのような依存の関係は結果的に彼女の強さを奪いかねないし、自分の地位や力量は、イリユーシャにまつわる問題から彼女を守りきるには、あまりにも足りない。なによりも、そのような私情と独占欲にまみれた関係性は、健全ではないし、主従関係に許されるものでも許されるべきものでもない。彼女と自分、双方のために。

彼女が進んで歩もうとしている道は、細やかな情愛や平穏な幸せに彩られたものではない。安易の逃避や一時の感傷が命とりになる、弱さが許されない、平穩の対極に位置する茨の道だ。自らその意思を表明した以上、生ぬるい言葉遊びにシン八が付き合う事は出来ない。

そうは言っても、傷ついたような主人の顔は、それを必死に隠そうとする涙ぐましい努力と共に、シン八の心を幾分か波立たせたのが。

「いずれにせよ」やや表情を和らげて、シン八は言った。「異世界渡来の物質の事といい、招獣自体のことといい、現時点で結論を出すことは性急了。ラトギアへの帰路は長い。考える時間はたっぷりとあります。今はお心を煩わされず、安眠を優先される事です。ナリタカの当座の処置に関しては私が処理します」

「……どうせ、眠れやしない」

「殿下にとって、健康であられる事は義務でございます。無理にでも、眠ってください」

「私には、夜更かしをする自由もないのか？」

「ありません」

「……分かった。言うとおりにすれば文句はないんだろう」

もう少し優しく、顔色が良くないから休んだ方がいいとでも言っただろうが良かったらどうか？大掛かりな術を使った後だから、余計に気をつけるべき、などと？

しかし天邪鬼というか、負けず嫌いというか、そんな風に指摘され、心配されればムキになって余計に強がるのがイリユーシャという主人である。まあ、配下の者に弱味を見せないことは確かに重要なのだが。

一礼して退出しようとする、シンハの背中にイリユーシャの声がかかる。ともすれば聞き逃しかねない、小さな声だった。

「……すまなかった。お前には感謝している」

すまない？それは、感情も露にシンハに八つ当たりまがいの態度をとった事に対してだったのだろうか？それとも、子供扱いは許さないといいつつ、甘えを見せたことに対してか？あるいは、そもそものはじめシンハの意見を無視して召還を決め、あまつさえ協力を余儀なくさせたことに対してだったのだろうか？……それとも？シンハは半身を返した。イリユーシャの、いつになく、ひたむきな眼差しを受け止め、流す。

「……感謝のお言葉や、ましてや謝罪に値するような何事も、私はしておりません。言わんや、今回の事例に関して私は全くの門外漢、つまるところ役立たずというわけでして」

笑みを含んで、そうかわしたのは、イリユーシャに対する気遣いゆえか、あるいはある種の意趣返しだったのか、シンハ自身にも分からなかった。

第五話 回想 (1)

お前は招獣だ。

シヨウジユウって、何だよ。

異界より招かれし獣。召還を通じて術士は異界よりかの者を呼び出し、血の契約を通して、使役する権利を得る。

某有名ゲーム制作会社の売れ筋RPGじゃあるまいし。大体、僕は獣じゃなくて、人科の筈だ。

私はイリユーシャ・フォン・リーエンヴァイン、ラトギアの皇女であり、お前の主人だ。

主人？僕はペットと同列って訳か？

斜向いの隣人が飼っていた太郎だか次郎だかという秋田犬の事を思い出した。あの犬もペットシヨップ辺りから自分をつれ攫つてきた人間共から主従関係を迫られたに違いない。

一方的に飼われるはめになった側の気持ちなど考えた事もないだろう連中から、突然主人面をされる。

監禁され、鎖に繋がれ、日に一度か二度食事が差し入れされる。

主人の気が向いた時にだけ頭を撫でられ、散歩と称して外に出る時にも、やはり自由はなく綱で束縛されている。本能は彼等の生活スタイルに合わなければ、ねじまげられる。逆らえば、打擲が待っている。

そう考えると、いつも自分が通る度にうるさく吠えていた犬にも同情の余地はあるというものだ。

周囲を見回して、ナリタカは引き攣れた笑いを浮かべた。

自分の今の状況は太郎だか次郎だかに比べれば、恐らくは遙かにマシなのだろう。

天蓋付きのベッド、丸テーブルの上でか細い湯気を上げているエスニックな夕食、豪華な家具でやたらと広い部屋……どれも、ナリタカの日常生活からかけ離れている。だからといって、ヨーロッパ

の古城宿泊ツアーのような雰囲気を楽しめるわけではないが。

鉄格子のはまった窓と、外側から施錠された扉が否が応でも、ナリタカに自分の身の上を思い知らせた。

監禁。良くて軟禁？

「…畜生」

畜生、畜生、畜生。

頭の中を、たった一つの言葉で満たしても、底冷えのするような悪寒は収まらない。

正体不明の狂騒は、ナリタカを捕まえ離さない。何も無い空間を自由落下している時の、あの怖気立つような浮遊感が、ナリタカを苛む。

そのたびに、視線を窓の外に送る。

漆黒の夜空に鎮座する異形の月は、何度見上げようと、少しも変わらずにそこにあつた。少なくとも、ここは日本じゃない。地球でもない。どこか、まるで別の場所だ。

お前にとっては、異世界といった方が妥当か。

屋上から飛び降りると、そこは異世界だった。

まるで、三文小説の導入ではないか。

こんな事つて、あるんだろうか？死んだ人間は、地獄ではなく異世界に行くなんて、新説じゃないか。

僕を元の場所に返すともいうんですか？

あの時はそれなりに真面目に言った筈の言葉が、今はナリタカを笑わせた。返すつて、どこに？屋上から自由落下している空中に、か？一秒後には、死ぬんじゃないのか？

そして、今、どういう訳かこんな場所において、当て所のない独白を続けている自分が無性におかしかった。

泣きたいのか、笑いたいのか分からずに、ナリタカは顔を覆った。掌に熱い液体と、痙攣のような笑いの先触れを感じた。

ああ……まずい。また、だ。止めようとした時には遅かった。顔面の筋肉は、もはや理性の管轄下を離れていた。ナリタカは、耳

障りな笑い声を聞く。自分のものだと分かっただけはいたが、見知らぬ狂人のように感じる。覆っても、覆っても、笑声は両手の隙間から漏れ、掌は指の隙間から滴りおちた。

ナリタカは、外界から自分を遮断するために、目を閉じた。

瞼をおろし、視界からのインプットを強制終了させる。だが、それも虚しく、暗くなつた視界は、元の世界につながっていた。寄せ寄せ返す記憶の波。一コマ、一コマ、鮮やかに着色されて、ナリタカの瞼を踊った。

第五話 回想 (2)

「学年中、六十三位・・・また下がったな。これだと、今の志望校は難しいぞ。去年の夏から、これでもう五十番は下がってるんじゃないか？」

進路指導室。空調が効いてないのか、座っているだけで額に汗が滲む。

「もともと、やれば出来る相馬だから、みんな心配してるんだぞ。なかには、わざと成績を落としてるんじゃないかって言う先生もいるぐらいだ」

無論、先生のことじゃないぞー低い鼻、平坦な顔立ちは眼鏡を留めておくには凹凸が足りないらしい。ひっきりなしに、一差し指で、ずり下がる眼鏡を押し戻している。

「ともかく、このままだと志望校のランクを落とすか、成績を挽回するかしないと・・・それともお前、何か問題でも抱えているのか？友達とか家庭とかで上手く行ってないのか？」

余計なお世話です、先生　　とは、ナリタカは言わなかった。それでは、この居心地の悪い時間を長引かせ、真向かいに鎮座する扁平顔の教師魂を興奮させる結果になるのは火を見るよりも明らかだ。代わりに、いえ、と頭を振った。

「ちよつと、いろいろ、受験が近くなつて落ち着かなくて・・・集中できないだけです」

教師は、共感深げに、そして、望み通りの答えを得た満足をのぞかせて、せわしなく頷いた。何度も頭を上下に振る様は、啄木鳥を連想させる。

「分かる、分かる。先生だつて、ずっと先生だつた訳じゃない。昔はこれでも一人前に受験生だったんだ。といつても、苦しんだのは大学受験だけだな。で、先輩として言わせてもらえれば・・・今、頑張っておけば、後々楽だつてことだ。なんだかんだ言つたっ

て日本は、いや日本だけじゃない、学歴社会なんだ。とくにお前の場合は私立のエスカレーターで、一度はいつてしまえば、後は楽なんだ・・・お前はラッキーだぞ。先生の時なんて授業料を払ってくれる両親もいなくて

別に、自分が選んだ学校じゃない。母親が是非にというものを、逆らうほどの理由を持っていなかっただけの話だ。

ナリタカは黙って啄木鳥の話聞いていた。話したいだけ話し終えると彼は「とにかく、しっかり頑張れよ」と無責任な言葉をかけて、ナリタカを進路指導室から送り出した。

場面が変わる。

ベージュのソファ。その先に長テーブル、さらにテレビ。視線を手元に戻すと、右手に持ったフォークの向こうに中華風山菜スパゲッティ、ホウレン草の冷製スープ。ツナのサラダに加えて、昨晩の残りのおかずが三品、食卓をとこ狭しと彩っている。

メニューは日々変わっても、いつも同じだ。味がしない。

「ごちそうさま」

「あら、ナリタカ。もういいの？まだ半分以上残ってるじゃない？ちゃんと食べとかないと、勉強に差し障るわよ」

「いや、小食にしておいたほうが、頭の調子がいいんだ・・・

おいしかったよ。ごちそうさま」

皿を持って、流し台に向かう。のれんを押し分けて、台所に入ると、居間で「お母さん」という声が聞こえた。自分に似た声質は、四分の一のDNAを共有している事実を強調しているようだった。

「この間の期末テストの結果。学年で三番だった。すごいだろ？」
二歳という微妙な年齢差は、往々にして兄弟を競争相手に変えてしまう。常に比べられ、劣っている兄の立場からしてみれば、出来のいい弟を持つ事は、まごうことなき不幸だ。表面上はどうあれ、心中穏やかではられない。

共有している筈の四分の一は声と外見だけで、中身の方は配列がまるで違つとしか思えない。

「まあ、そうなの。あなたも兄さんも出来がいいがから、お母さんは安心だわ」

別に、この「兄さんも」の部分にナリタカの事が入っているわけではない。「兄さん」というのは、ナリタカではなく最年長の兄の事であり、これまた両親の鼻を高くすることにかけては、他を抜きん出ていた。

小中高と共に、文武両道、温厚篤実、眉目秀麗との賞賛を惜しげもなく浴びて老い育ち、公立の某一流大学には主席で合格した。それでいて、卒業後はアフリカに行つて難民キャンプなどで、ボランティアに捧げたい・・・などという、嫌味な性格の持ち主である。

両親も、折角の将来を投げ打つてと嘆くわけでもなく、「当人の自由意志」とやらを尊重し、むしろ自慢に思っている節がある。出来た息子にして、理解のある親という事か。

兄と喧嘩をしたことはない。性格も経歴に劣らず優等生の兄であるから、仮に、こちらが突つかかかっていったとしても、相手にされたかどうかも疑わしい。

第一、兄に「否のうちどころもない」というただ一点を除いて、正に否のうちどころのない人間だ。ナリタカもまた、自分から喧嘩を売るタイプではなかった。もつとも喧嘩を売りたいくても売れない相手はいるものだ、実の兄を見るにつけ実感する。

弟はといえば、外見と声質だけはナリタカに似ていたものの、性格は明朗快活、時に破天荒とすら称される自由人である。兄に似て文武両道。文よりは武に偏り気味だが、勉学の成績はナリタカが同年だった頃に比べてはるかにいい。

末っ子ゆえか、無神経なことを平気で言い、あまり人の感情を斟酌して行動するタイプではないが、総じて嫌味はなく、その愛嬌を加えると大概の人間は許してしまう。いるだけで場の空気が変わるような天性の明るさは周囲のものを引きつけずにはおかず、学校で

はつねに人気者だった。同じ中学に通うナリタカは、同級生にすら「君のお兄さん」と認知される有様である。

こんな二人に挟まれたナリタカを形容するなら、冴えない奴、の一言につきる。兄弟中のみそっかすといえ、話が早い。

親戚の所に遊びにいつて、上下の二人が賞賛と注目を浴びるなかで、一人だけ隅に放置され、顧みられないどころかその存在すら忘れられがちな…その手の人種だ。よって教育ママとしては一番危なっかしい息子であり、上と下の二人とはまた違った意味合いで多大な関心を向けられている。

三つの塾を掛け持ちし、必死に勉強してなお、学校での成績は上の下。車にもスポーツにも特に関心がないという男性失格であるのに加え、放課後には図書館に入り浸る根暗の帰宅部、果てには一時期、部屋で納豆菌を栽培していたとなれば、もはやどこに出しても恥ずかしくない社会的マイノリティーだ。

外見は、中学にはまだまだ残っている成長期前の小学生然としたもので、これに女顔というハンデと一般受けしない生活スタイルを加えれば、異性にもてるのは困難と言わざるを得ない。

人と話すのは苦手な方で、大勢の人間の前で話すと、心臓と胃がひっくり返って、目眩のあまり摔倒しそうになる。赤面症ではないので、あがっていることを周りに悟られにくいのは、せめてもの救いだった。

人付き合いは、しんどいとは思うが孤独をえらべるほど強いわけではなく、やはり同じような学校の下層扱いのものと消極的につるんでいる。

第五話 回想 (3)

最近では「狂える十代」、「暴走する若者たち」、「抑圧された自我」などの字面が紙面を飾っているが、そういう事を書いている人たちから見れば、僕は理想的な犯罪者予備軍に違いない。

といって学校に爆弾や刃物をもって乱入したり、一家惨殺事件を起こすほど勇気があるわけでもなく、害したいほどの他者がいるわけでもない。

だからカッターやハサミの刃は、もつぱら僕自身の体に向けられている。もつとも手首ではあまりにもベタだし、ためらい傷は傍目にも明らかかな上、致死率だって低い。そもそも出血多量で死ぬには時間がかかりすぎ、その間に誰かに見つけれられ一命をとりとめた拳句、なんらかの後遺症でも残ったりしたら目もあてられない。

その点、脇：つまり両肩の下、むだ毛が大量に生える部分だが、そこが大動脈を通っていて、しかも、これといった止血方がないため、出血死するには中々、効率的であるそうなのだ。

しかし別に今すぐに死にたいという程、事を急いでいたわけでもなかったので、そういう知識は本当に自殺する時までとっておくつもりだった。

手首と脇の中間に位置する肘の内側は、気軽に傷つけられる場所の一つだった。ひよっとしたら死んでしまいかもしれない、というスリルに酔いながら、一本、二本と朱色の線を引いているうちに、嫌な事や辛い事に自分なりの折り合いをつけていく。

その痛みを思い出せば、同じ事が起こっても以前よりは覚悟をもって臨めるような気がした。

してみれば、おまじないだろうか？

そうかもしれない。自傷行為というのは、僕にとっては一種の儀式だった。まず、鬱屈した衝動を満足させてくれる。やがて、可愛そうな自分に陶醉し、こんな行動に追い込んだ人間が悪いのだと自

己正当化の一助を担ってくれる。

人知れず血を流し、人知れず自己嫌悪に酔いしれる。卑屈を通りこして、もはや変態的な倒錯である。

だが異常者の心理は、どんな正常者の奥にも潜んでいるというのが僕の持論だ。親切で善良で正しい筈の人間の中に、巧妙に粉飾された利己的で傲慢な横顔を見いだす度に、僕は自分の事を柵に上げて、その醜さを嫌悪した。

自傷行為とは、とどのつまり逃避である。

それを行う事によってのみ息苦しい生は少しだけ風通しの良いものになるのだった。趣味はあっても夢はなく、将来の展望なんて口にするだに、おこがましい。

僕が生きていくことは僕自身を含めて、常に周囲の人間を失望させ続けていくことだった。自分だけでも、周囲だけが悪いとも思えぬまま、自己嫌悪と責任転換を行き来しながら、僕は中途半端な生を……それこそアフリカの飢えた子供達に比べれば、何とも生温い生をむさぼってきた。

どうやって、それを終わらせようか？それだけを考えながら。

あの日から、ずっと。

「ナリタカ？」

食器を持って立ち尽くし、ひとり思考に埋没していたナリタカを、訝し気に見る母親の顔があった。

「ああ。ちょっと、ぼうっとしちゃって。最近、睡眠不足気味だからね」

ありがちな取り繕いだが、別に独創性が求められてるわけでもない。

人は自分が受け入れたい事実を受け入れる。それが、言い訳であろうとなかろうと、それが納得しやすいものなら、大抵はそれ以上は追求しない。

この場合、母親は息子の変な挙動を心配し、息子はその心配が杞憂だと納得させてやる義務がある。

そうでなくとも最近十代による物騒な事件が増えてきているから。まさか自分の息子が。悩んでいる風には見えなかった。普通の子だったのに。

そういう声が飛び交う中、世間の親は多少、過敏になっている。誘導しなければならぬ。自分は至って、健全、正常、悩んでいる事もなければ、怪しい挙動もない。どんな兆候も見られない。

「でも寝不足なんていつてられないよ。順位が下がっちゃった分、しつかり遅れを取り戻さないとね。まあ、兄さんみたいな訳にはいかないけど、とりあえず志望校には合格してみせるよ」

明るく、普通に、朗らかに。

声が浮いてる。ちよつと、やりすぎたか？キャラじゃないのは百も承知だ。だが例の事件を期に、ナリタカは自分の性格を矯正した。少なくとも、他者の印象や評価を変えた。

クラスの下層扱いと付き合ってるという点では、前と似たり寄ったりだが、以前より社交的になり、より一般受けする中学生男子になるという目的を多少なりとも達成した。

つまり自分というものを偽り、取り繕うのが、上手くなった。お陰で前よりも生きやすくなったような気もする。その自己変革の動機が死ぬためというのは皮肉な話だったが。

母親は気遣うような微笑みを浮かべて、言った。

「そうね。今度は合格できるといいわね」

今度は。つまり現在通っている中学は第一志望ではなかったということだ。ナリタカは両親が推薦した第一志望の私立中学に落ちた。

これが兄であれば母も多分に衝撃を受けただろうが、ナリタカが落ちたときは、仕方がないなという感じで「大丈夫よ。学校のレベルが全てじゃないわ」などと思ってもない事をのたまったその舌で、「滑り止めの中学だって十分いい学校よ」と今度は正反対の主旨で、ナリタカを慰めるのだった。

ナリタカと同じ学校に通う弟は、両親のすすめをつっぱね、ただ近いという理由のみで現在の学校を選んだのであり、不本意に滑り

止めに通うはめになったナリタカとは、その意味合いからして違う。

「がんばってね」

相も変わらず、気遣うような、こちらの心中を伺うような、気がかりを含んだ眼差し。

理解のある親というものは、決して頭から子供を否定することはない。視線で、言葉の端々で、動作の一つ一つで、否定する。真綿で締めるように、緩慢に、柔らかく。

「うん。頑張るよ。中三になってからじゃ遅い。今が正念場だからね」

頑張つて頑張つて、いつまで、どこまで、頑張ればいいのか？
ナリタカが納豆菌やその他の怪し気な趣味に別れを告げ、標準的
中学生男子としての仮面をつけ始めたとき、母親は「ナリタカが最
近明るくなった」と喜んだ。

自分を殺す術を学び、他者を他者と割り切り、どんな期待も諦め
た自分を「優しくなった」と誉めた。

「ああ、もう半だ。寝る前に、もうひと勉強したいし、もう部屋
にいくよ」

そういつて背中を向ける。

「じゃあね。母さん」

第五話 回想 (4)

目を開けた。

涙はいつの間にか止まり、嗚咽も収まっていた。干上がった喉が、卓上の水差しを掴ませた。脇に用意されていた金属製のコップも使わずに、赤銅の水差しから直接、水をあおって、飲んだ。

それから這うように窓辺により、月を確認した。

月は、いつの間にか山の端に傾いて、山脈にその巨体を横たえていた。赤く大きく、錆びた鉄のような鈍い輝きが、周囲を照らし出す。

白熱灯のない世界は、ひっそりと寝静まり、建物群のそここに、ちらちらと揺れる炎の他には、明かりらしき明かりはほとんどない。市街地と思われる場所の向こうには、闇そのものが広がっていた。その手前にある、炎を蓄えた細い円柱上の建造物を灯台と見るならば、恐らくは海なのだろう。さざめく水音が寄せては返し、闇の彼方から潮の匂いを運んでくる。

ふと、笑みが漏れた。

ここが、どこであろうと、なかるうと大した問題ではない。

自分は死んだのだ。成功したかどうかは、疑わしいが、自殺は自殺。自分の存在を消すという行為を実行した事には代わりはない。今ここにいるのは、幽霊のようなものだ。

いわば、相馬成隆の抜け殻。であれば、脱臼がどうの、監禁がひどいの、ここはどこなの、どうしてこうなったのだと、わめき散らすのは、ちゃんちゃらおかしい。

もう、いい。どうでもいい。

あの少女が何を言い、何を望み、自分がどうなるのか、そんな事は考えるだけ意味がない。

招獣であるというのなら、それでいい。あの少女が自分の主人というのなら、自分はペットで構わない。とりあえず相馬成隆でない

のなら、誰でもいい。何でもいい。

明日、目覚めて元の世界に戻っているよりは、ここの方がまだ。

「……疲れた」

ナリタカは天蓋付きのベッドに、体を投げ出した。

第六話 司書 (1)

カトル・マルグーは夜が明けるのをまんじりともせず、待った。本当は夜の内に、飛んでいきたいぐらいだったが、王族でも貴族でもない自分が皇族の屋敷に単身馬を乗り付けて、番衛に取り合ってもらえるとも思えなかった。

そもその面会を求める理由じたい、声高に言える種類のもではなかったし、嘘八百をでっち上げるには、彼の性格は少々、生真面目すぎた。それに、彼とて自分の懸念に確信があったわけではない。

まだ、赤味の抜けきらぬ朝の光が、寄宿舎の窓を透過して、卓の上に無造作に投げ出された文書を照らしだしていた。カトルは近寄って、その百五十頁あまりの厚みを手に取った。その重みに、彼は溜め息を漏らした。

それは、彼が半年かけて、セル語に翻訳した、古文書の訳文だった。

原書は文書館の奥深く、特級の閲覧許可がいる一画に秘蔵されている。そこに納められた文書の数々は、持ち出し禁止は勿論のこと、複写も禁じられており、閲覧にはベルグ王家の許可がいる。文書館の大移動がなければ、到底、一介の司書であるカトルなぞが、その本を眼にすることはなかったはずだ。

そして、そうであるべきだった。

カトルは悔恨に苛まされていた。彼は司書としては決してやってはならない事をした。

自分の立場と権限を著しく逸脱したばかりでなく、それが明るみにでた暁には、カトルも、またもう一人の共犯者も、どんな処罰を受けるか知れたものではなかった。

知的好奇心とは言わない。最初はただの偶然と、ささやかな好奇

心からだつた。それを人は悪魔の囁きと呼ぶのかもしれないが。

旧文書館から新文書館へ、棚から棚へ、行き来する司書達の一人として、自分の腕の中に収まっている羊皮紙の山に、興味を覚えなかったといえは嘘になる。なにしろ、それらは普段は埃と沈黙と厳重な警護の中で、半世紀に一回来るか来ないかの来訪者を待ち続ける、ベルグ王家の至宝であつた。

持つ手も、震えようというものだ。

計らずもその一冊を落としてしまった際の心情は、とても言葉には表せない。暫くそのまま硬直していたと思うが、いつまでたつても罵声が飛んでくることはなく、ようやくの事で周囲の様子を確認した。そして、安堵の溜め息をついた。

文書館は大移動のため手狭で、しかも雑然と積まれた貴重な古書の壁が、上級司書や同輩の目からカトルとその失敗を隠してくれていた。

胸をなで下ろした。見咎められる前に自分の失敗の痕跡を消すべく、カトルは床に這いつくばるようにして本を整えた。

幸い、目に見えるような損壊は生じていなかった。祈るような気持ちで中身を確認めた。

値段などつけようのない、貴重な古書なのだ。カトルとて、司書の端くれだ。バレなければ、いいという問題ではなかった。

だが、今にして思えば、自分は、中を覗き見するという行為に、何らかの理由付けが必要だっただけなのかもしれない。禁忌を犯す口実を、自分が望んでいなかったとは言切れない。

表紙には、走り書きのような文字で何かが書きとめてあつたが、インクが滲んでいて読めなかった。ソレ以外には、題も著者の名もない。

心臓が、高鳴る。もう一度、辺りを見回して、人間の不在を確認した。

埃の匂いのする書物を開けると、古代文字の羅列があつた。慎重に、頁をめくる。指が震え、思うに任せなかった。

物質とエネルギーは、創られることも、壊されることもない。雨が地に落ち、川や地下水や海を造り、やがては蒸発して空に返り、雲を構成し、やがては大地へと帰ってくるように、万物は循環する。

魔道とは、すなわち物質からエネルギーを抽出し、その形を変えて、効率的かつ我々の役に立つように導く技にすぎない。丁度、水車が川の流れを槌の上下運動に変えて、粉をひくように。

だが、もしエネルギーの総量が一定だというのなら、我々がしばしば経験するように、魔道において入力と出力のエネルギーが一致しないのはなぜか？

この消えてしまうエネルギーの事仮に損失エネルギーと呼ぼう。

一つのエネルギーを、他のエネルギーへと転換する際には、必ず損失が生じ、両者の差は熱や風などになって散逸し、失われてしまう。その際に生じる膨大な損失エネルギーは時に出力の数倍、時として数十倍に相当する。つまり、それだけのエネルギーを、我々が潜在的に活用しうる余地が残されているということである。

もっとも、これは衆知の事であり、古の昔から術者達はいかにこの損失を少なくし、効率的にエネルギーを取り出すかを研究してきた。術中に置ける精神力の向上、微細なコントロール。技術面の魔道学において、これこそが一番研究されてきた分野だといっていい。しかし、と私は思う。転換の際の技術的なコントロールをいくらか洗練させても、おのずから限界があるし、その面での研究はしつくされた感がある。いまや、考え直すべきは、そういった方法論そのものではないだろうか。

もし、一番慣れ親しんだエネルギーが、もっとも糧として効率的だと仮定するのならば、それは人間の生体エネルギーという事になる。その論法に従うのならば、必然的に、術者自身の命を糧とするのが、究極の変換効率を可能にするという推論が導かれる。

研究結果からは、被験者二十名の命から、中級術者が得た出力は、平均して人間を七人殺す程度のものであり、また重傷のも

のを癒すには最高で二人だった。

どのような術でも、成功率を飛躍的に高め、魔力の質、量、コントロールの不在を補うためには、自分自身の命を糧とするのが一番効率がいいという推論はここでも確認される。

ここでいう、命とは一般的に術者が術を行使する際に消耗する体力のことではない。術の乱発による、身体的な影響、あるいは長期における健康の害も含まない。もっと、根源的な生命力の源の力である。我々の体内で静かに時を刻む、有機的な微小の構成要素、その内部に蓄えられた……。しかし、これは、胡桃のように固い殻に守られていて、中の実を取り出すためには、まずこの殻を割る方法を見つけ出さねばならない。

人間には自己防衛反応というものがあって、実験に同意した被験者を対象とする場合においてさえも、正攻法では上手くいかないのは前に述べた通りだ。折角の高変換率のエネルギーであるのに、取り出す際に無駄が生じてしまつては、本末転倒である。術者が己の命を取り出す場合にも、防衛本能が術を阻害する主因となる。

では、どうすればいいか？

カトルは本を閉じた。

数頁をめくつたばかりだった。興味を失つたのではない。だが、それは、ただの好奇心で覗き見が許される種類のものではなかった。胸は早鐘のようだった。脳裏に焼き付いた文字を未だに翻訳し、反芻している自分がいる。喉はからからだった。

……これは、一体、なんだ？

研究とある箇所は人体実験と言い換えてもよく、書かれている内容は、あまりにも突飛だ。人体の生体エネルギーが術の糧として、最も効率的？そんな話は聞いた事もなければ、考えた事もない。王立学院で学んだ十年余の年月の中で、ただの一度も。

なによりも、人の「命」を術の対象とすることは教会法で禁じられている。それが、合意に基づいた被験者であるうと、己自身であるうと、禁忌には変わらない。

カトルは常々、疑問を覚えていた。

「命」を術の源とする事を禁じる教会法は、確かに道徳的見地からして正しい。ギルドもそれに賛同している。

しかし……そもそも、教会や魔術士ギルドが説くように、「命」を術の行使の原動力として使うことが効率的でも現実的でもないならば、なぜわざわざ法典に一章をさいてまで、厳重に禁じる必要があるのだろうか、と。

そして、その疑問は、もしこの書物に書かれている事が正しいのなら、分かるような気がするのだった。つまり、なんらかの特殊な方法によって、「命」を使う事で通常では考えられない変換率を可能に出来るならば、そしてそのような方法が万人に開かれたのならば、それは 脅威だからだ。教会にとって、ギルドにとって、いや事によると、世界における魔力の均衡にとって。

多大なる力は、バランスを崩す。その先にあるのはカオスだ。

仮に術者自身の命を削らなければ得られない、リスクの高いものだとしても、人は必要な時、すぐそこにある力を使わないでいられるほど、強くはない。

もし、我が身を捨てることで、それよりも大事なものを救えるとしたらどうだろう？自分の命を代価にしても果たしたい復讐、野望、夢。もし、そんな可能性が不特定多数の人間に開かれるとしたら、個人の衝動が世界を揺るがす事になりかねない。その際、国家や教会、種々の権威は秩序や統制の執行機関としての価値を失うだろう。力は魔だ。持てば、使いたくなる。一度使ってしまったら、もう逃れられない。個人であれ、集団であれ、それは変わらない。

人間が樂園を追放される原因となったのもまた、原初の人間が、その身には過ぎた力を入れてしまったためだ。神は人間の越権を許さず、その時より、人は地を這いずりまわる運命となり、永久の安寧を失った。

有史以来、持たざる者が権力の階梯を上り詰めた例は数多にあるが、その道のりが平坦だった例はない。人がその身の間尺に合わぬ

ものを欲すれば、周りを巻き込まずにはおかない。悲劇は増産され、惨劇は幕をきつておとされる。

仮に、多くの犠牲の果てに望むものを得たとしても、そこに安息はない。力を維持するためには、それを脅かすものを取り除きつづけなければならぬ。猜疑と疑心暗鬼は、支配者の伴侶だ。特に、他者を裏切り、利用し、押しつけてその座についた者にとつては。

剣を一度握ってしまったものが、それなしでは生きられないように、振り上げた刀の数だけ、斬った敵の数だけ、犠牲にしたもの数だけ、呪縛は深まる道理だ。

だから、古の昔から、人は自然と生命を司る技を魔術と呼んだ。それは、戒めなのだ。使う者が、その恐ろしさを忘れ、力に溺れないようにとの。

第六話 司書 (2)

カトルは深く、息を吐いた。

あの時、あの禁断の書物を開いた時から自分の内に根ざした、底深い恐怖が少しでも薄れた訳ではない。いや、むしろ、そこに書いてある事の信憑性が増すごとに、恐怖は比例して大きくなっていった。

きっかけは、確かに半ば偶然だった。だが、カトルは自分の意思で禁を犯し続ける事を選んだ。

日一日、人目を盗んで、めくった頁。読み進めるほどに、自責の念は深まり、煩悶は増した。それでも、読まずにはいられなかった。私にとつての魔は、すなわち知か。

物心ついた時から、知る事への渴望が、カトルの行動規範だった。平民である自分が、今ここでこうしているのも、家族を捨て、宗教を捨て、学び舎の手を取ったからに他ならない。そうしてみても、自身の中にあつた酷薄さに気がついた。

そうだ。もし、今この時、あの瞬間に戻ったとしても、自分は同じ道を辿つたに違いない。

ただの司書であれば到底触れ得ないような秘密を、罪の重さにおのきなながらも、カトルは嬉々として受け入れた。

人の知り得ぬことを知り、まだ見ぬ思考の地平を眼の辺りにする瞬間。それは真実を知りたい、という壮大な気宇などとはおよそ無関係で、もつと無目的で本能的な衝動なのだ。

ただ、知ること。それだけが、カトルを満たし、充足させる。

それでも、自分一人の問題にしておけば、まだましだった。だが自分は、それを他者と分かち合い、話し合いたいという欲求に負けた。

そこに書かれた事を、教会やギルドの枠に捕われずに評価し、有意義な意見を期待出来る人間。また、平民の出自のカトルを相手に

聞く耳を持っている。そんな人間が、この学院内に置いて一体何人いることが。

結局、自分は彼女を巻き込み、その危険性を薄々承知していながらも、翻訳した草稿の二部の内、一部を渡してしまった。

自分は知った事を後悔はしない。ただ、彼女の道を誤らせてしまったかもしれない可能性、そしてそれによって生まれる潜在的な脅威、それをこそ恐怖する。

カトルは全ての元凶である文書から視線を引きはがし、顔を上げた。夜明けの名残は、もうどこにもない。

「……もうすぐ、第二の鐘がなるな」

自分は確かめねばならない。

思い過ごしか、そうでないかは、会えば分かるだろう。

そして、まだ間に合うなら、あの伶俐で孤独な目をした共犯者に、己の不誠実を謝り、もう一度はつきりと念を押すのだ。

カトルは羊皮紙の束を宙に放り上げた。それは放物線を描いて床に着地するのを待たず、空中で青い火を吹いて、燃え上がった。

床にふりそそぐ赤い火の粉が灰色になるのを見届けると、カトルは部屋を後にした。

第七話 平民

「殿下っ」

男は、皇女の到着を待っていたようだった。正門をくぐるや否や、待ちかねていた者の性急さで駆けつけてきて、馬上の一行を振り仰ぎ、続いて一礼する。

「よろしければ、少々、お時間を頂けないでしょうか。お話したいことがあります」

慌ただしい略式礼を終わらせて、男は開口一番そう言った。

若い男だ。十代後半から二十代前半。

透明感のある水色の瞳が印象的である。ラトギアの第一皇女に対する物怖じも媚びも認められない。清澄な眼差しが、いつそ、不敬に当たりにかぬないほど真つすぐに、イリユーシャを見上げる。

「ああ、カトルか。どうした？改まって」

イリユーシャの気安い口振りと、男の痩身を包んでいる緑の学服が、二人の関係を端的にあらわしている。

学友といったところか。ラトギアの王立学院では貴賤の別はないらしい。神の御前と同様、学問の前に身分は重要ではないとかいう理念をかかげている。

理念の中身の程は、学生の九割以上が、国内外の有力貴族や王族に占められているという実態を知れば己ずと知れたものだが。だが、どれほど形骸化された建前であっても、それなりの影響力というのはあるものらしい。

おそらく、このカトルという青年の身分はあまり高くはない。にも関わらず、二人の間に流れる空気は、表層的ではない交友関係を忍ばせる。

とはいえ、皇女の笑みを受けて眉一つ動かさない愛想のなさはどうした事だろう。いかに彼の案件が急を要するものであれ、また仮

に二人の関係が身分を超越したものであれ、最低限の社交マナーというものはある。

それどころか水色の瞳の底にちらつく煩悶と苛立ちに似た感情は刻一刻と焦燥を深めていくようだった。

「改まつてお話したい理由は、殿下御自身が一番ご存知だと思われませんが」

いよいよもつて、険を含んだ物言いである。

信じがたいことだが、彼は、本来なら雲上人であるラトギアの皇女相手に、どうも怒っているようである。

イリユーシャは例によつて肩をすくめ、馬上から一呼吸で地面に降り立つと、手綱を供の者におしつけカトルの前に立つ。

「これから、学院長をはじめ、方々に別れの挨拶をと思つていた所だが……まあ、順序が多少狂つたところで、問題はないだろう」

それを聞いて、カトルの顔は益々固くなつた。

「では、もうご帰国なされるのですか？それは、また……いかにも急な」

「急か？ まあ、そつだな。先触れの使者があつてから、護衛隊の到着まで半月と置いていない。ラトギアの宮廷は、よほど私が恋しいらしい」

誰もが知つているカーライル暗殺事件とイリユーシャ留学の因果関係を前に、中々図太い物言いだと言わざるを得ない。

「ああ、そつだ。紹介が遅れていたな。こつちがシンハヴァイン・エトキア。私の本国までの護衛役だ。そのために、戦地から呼び戻され、はるばるベルグまで出向くはめになつた可哀想な男だ」

カトルは初めてシンハの存在に気付いたようだった。いままではイリユーシャに付き従うその他大多数と一緒に埋没していたのだから。

よく言えば朴訥、悪く言えば垢抜けない感じのする青年は、慌てて非礼を詫びると、社交辞令をまくしたてた。

「天下に名高い、エトキア家の方にお会いできるとは光栄です。」

シンハウ、アイン様のお話は、かねがねイリユーシャ様よりうかがっておりますれば、始めてお目にかかったような気もいたしません。台詞に反して、口調にはあまり心がこもっていない。社交辞令にしても、もう少し愛想があつてよさそうなものだ。

「シンハ、この青年は、カトル・マルグーといつて」

カトル自身の挨拶も終わらぬうちに、自己紹介を先取りして、イリユーシャが割つて入る。「その名前の示すとおり、平民の出身だ。つまり、当学院内において、もつとも優秀な集團の一人というわけだ。中でも彼は、将来を嘱望される期待の俊英、前途洋々たる若者だ。この若さで文書館の司書を務めているだけでも」

「イリユーシャ様……」

その先の言葉を待つまでもなく、カトルの目が、全身が言っていた。話を切り上げて、そろそろ本題に入らせて欲しいと。

これだけ、内心を露に出しては、まるで事情を知らないシンハであつても、何か並々ならぬ話があることは察せられる。シンハが分かるのだから、当事者のイリユーシャが話の内容に心当たりがないとは思えない。

「ああ分かつている。話、だったか」

くるりと辺りをみまわして、イリユーシャはカトルに向き直る。どことなく演技めいた白々しい態度だ。

「人払いが必要か？」

「恐れながら」

イリユーシャは頷く。

「そういうことだ。みな暫くの間、職務を中断して思い思いに休憩でもとつてくれ。なんなら、そのまま帰つてこなくともかまわない」

彼等は頭を下げる事で返事に変えた。

職務を放棄する気も中断する気も毛頭ないだろうが、とりあえず皇女の邪魔にならない範囲で続行しようというわけだ。

「シンハ、お前もだ」シンハは思わず主人の顔を見返した。「せ

つかくベルグに来たんだ。大陸に名高い文書館を見るもよし、街に繰り出すもよし。少しは羽を伸ばしてくるといい」

こちらを見ようとしないう横顔に、シンハは皇女の意味を再確認する。

イリユーシャが今までシンハを人払いの中に含めたのは、相手がイリユーシャよりも上座に座る人間の場合だけだった。カトルは平民である。

人払いが必要だとしたら、それはイリユーシャ自身の判断、自分に話を聞かせたくないという事に他ならない。

隠し事。そう取ってしまうのは分不相応な見当違いだろうか。

イリユーシャが、何かを隠している、あるいは故意に話していないことがあるというのは、薄々、感づいてはいた。しかし、ここに至ってその疑念は確定的になり、しかもこころもはつきりと関与を拒絶されるとなれば、それは自分が思っていたよりも深刻な問題なのかもしれない。

主人が自分に全てを話すなどとは思っていない。だが、それは瑣末な事象や、個人的な事情や、つまり重要でない案件に限った事だと、そう勝手に思い込んでいた自分を発見する。

問題があれば、自分にこそ真つ先に相談されてしかるものだと、そういう慢心が心の内にあった事は確かだった。この一抹の苦さは、自分こそが彼女の一の臣と思いが上がっていたというつけか。

「分かりました」

胸中に渦巻く感情を水面下に沈めて、シンハは主人の命を受け入れた。

第七話 平民（後書き）

改名のお知らせ：お気づきの方がおられるかどうかは謎ですが、この度シンハヴィルは諸事情であって、シンハヴァインに改名いたしました。いえ、だからなんだ？って感じですが。

第八話 共犯 (1)

「丁度いい。こつちもお前に話したいと思っていたところだ」

学院の外れにある礼拝堂を選んだのは、一つに滅多に来訪者のない事、また小さな礼拝堂であるため人の有無を人目で確認出来る事、さらに聖域であるため常時魔道の結界が張られているため万が一にも盗み聞きされない、以上の三点からだった。

「なぜ、ですか？あなたに一部を渡したとき約束した筈です。どのような理由であれ、決して文書に書かれている事を試したりしないと。それなのに、あなたは……」

カトルの語り口は苦い。

それに比べて、皇女はといえば、礼拝堂の長椅子に腰をかけ、頭を背もたれに寝かせて、丸天井を仰いでいる。

まさか、言っている事が分からないでもないというだろうに、この余裕は何だ？

「約束を破られた、と詰りに来たか？子供でもあるまいに」

天井を見上げたまま、皇女はおかしそうに、笑う。

「それにしても、昨日の今日で、何とも目敏いことだ。どうして、気付いたのか聞いてもいいか？後々の参考のためにも」

どうやら、否定する気はないらしい。それどころか、居直ったようにこの態度はどうだ？

反省の色を見せるどころか、これでは立場が逆ではないか？自分は皇女を問い質しに来たのであって、その逆ではない。

憤懣を押し殺して、カトルは口を開く。今は個人的な感情に拘泥している時ではなかった。

「先ほど、殿下を目にするまでは、確信はありませんでした。無惨なものです。貴女を取り巻く、生体エネルギーは、明らかに減衰している」

「明らか、ね。謙遜しなくてもいい。普通なら、体調を崩したで

通る程度だ。お前ほど、感知能力の高い術士はそうそういない」

「巨大な術を行使した影響もあるのでしようが、それだけでは、体組織や、生体組成単位の一つ一つが、劣化している説明にはならない。失われたのは生命力。人体に蓄えられた命の量そのものが、目減りしているのです」

皇女は、頭を背もたれに預けたまま顔だけをカトルに向けた。

「なるほど。お前は、術士にして司書という肩書きに加えて、医学の心得もあったな……劣化か。とどのつまり私の寿命が縮んだと」
そうだ。

禁術を使うという事は、そういうことだ。

その代価は人間という生物にあらかじめ設定された有限の時間。生体に蓄えられた命の量。

砂時計の砂がさらさらと下にこぼれるように、生物はゆっくりと死までの時を刻む。

禁術の源は、その命の砂であると言える。本来は生体維持のために使われるエネルギーを大量に流用すれば、当然その人間の物理的寿命に影響を与えずにはいられない。

「だが、それは私に会って初めて分かったことだろう。お前が、確信に至らないまでも、疑いを抱いたその経緯を聞いている」

カトルは俯いた。すこしの逡巡の後に、そのまま頭を下げる。

「……ご無礼はお詫びします。私は、貴女に訳文を渡した時、万が一の時の保険として、鈴をつけました」

「鈴？」

「はい。無論、本物の鈴ではありませんが、似た働きをします。強大な魔力の振動に、揺れて鳴る鈴です。つまり、あなたが大掛かりな術を使えば、その鈴が鳴るわけです。鈴は二個で一对。あなたにつけた鈴は、私が持っている鈴と一对で、一つが鳴れば、もう一つも共鳴します」

「一種の反応装置か。いつの間に私にそんなものをつけた？」

「訳文そのものが鈴です」

皇女は舌打ちをする。

「昨夕その鈴が鳴りました。重ね重ね、無礼なことですが、私はその直後、貴女の屋敷内を遠視しよう試みました。むろん皇女殿下の屋敷に結界が張ってない筈がないのですから、無理は百も承知でしたが……結果から言えば、やはり無理でした。しかしながら結界に歪みが生じていたのは分かりました。さらに言えば、その歪みは内側からもたさされていた。もとより、あの手の結界術というのは、外側からの干渉には強くとも中からは脆弱なものです……結界の乱れが何を意味するのかはともかく、その内側で何らかの異変が起こつたというのは分かりました。例えば、貴女が術をコントロールしきれず、暴走させたとか」

話ながら相手の様子を伺う。皇女は、いささか拍子抜けするほど、あっさりと認めた。

「まあ、結果だけ言えば、それに近いか。私も大概、爪が甘い。結界が乱れていたのはわずかの間だった。よもや、あの時間にお前が覗き見しているとも思わなかったな。大丈夫だと思っていた」
「無論のこと、以上のどれ一つをとっても、貴女が禁術を行ったという決定的な証拠には成りえません。ですが、これだけ揃えば事情を知っている私には十分でした」

そういつて一端、言葉を切る。

「……どうして、ですか。あなたは、天下のラトギアの嫡出の第一皇女で何不自由ない身分のはずだ。知にも、才にも、美にも、恵まれている。それ以上、何を望むというのです？ いったい何がそこまで、貴女を駆り立てたのです？ 私の信頼を裏切り我が身を削つてまで成功させねばならなかった術とは何ですか？ 私には知る権利があるはずですよ」

望む答えは意外なほど呆気なく放つてよこされた。

「招獣の技」

耳を疑った。

招獣？ 招獣の技？ ラトギア皇家の血継能力の？

皇女の言葉を反芻し、意味を咀嚼する。そうして一つの答えに行き当たった。他に考えられる理由はなかったが、その答えは必然的に何故という新たな問いに行きつく。

「……つまり、貴女の狙いは…ラトギアの皇位、というわけですか」

「そうとつてもらって構わない。カーライル皇子と比較して私が有利なのは嫡出という、ただの一点のみだった。現状では私をすり寄ってくるような輩は現体制に不満を持つ、ケチなはみ出しもの共だけだ。信用も出来なければ頼りにもならない。少しでも目端のきく人間は、私のような存在に関わって、立場を危うくするような馬鹿な真似はしない。そんな、血統以外には何の取り得もない第一皇女が、三年ぶりに帰国して皇位継承を争えるはずもないだろう？だから私には招獣が必要だった」

「では、なぜ皇位を望むのですか？ましてや、女性である貴女が」
皇女は溜め息をつく。

人に質問はする割に、こと質問される側に回ると途端に熱意を失ってしまつらしい。

「権力を、力を求めるのに性別が関係あるか？」

「論点をずらさないでください」

そんな人を喰った答えで、煙に巻かれる気はない。本人があくまでその気なら、こちらから斬り込んでいくまでだ。

「……それは、殿下と父君であらせられる皇帝陛下との関係に起因するものですか？」

誰もが知っていて口にしない皇帝父子の不仲。公然の秘密をカトルは初めて口にした。恐らく、皇女相手にそんな無礼を働いたのもカトルがやはり、初めての人間だろう。

効果は、あった。

皇女の、例の余裕たつぷりの仮面が音もなく、はがれ落ちていった。皇女の逆鱗に触れた事を知るのにそう時間はいらなかった。

元々きつい印象を与えがちな切れ長の眼が、さらに細められ、そ

の奥からカトルの知らない光に染まっていく。

今まで身分の隔たりにも関わらず、カトルに向けられてきた、気の合う学友に対する尊敬と親愛の念。それらのどんな片鱗も、底冷えするような碧の光彩に見出すことは出来なかった。

威圧と敵意を隠そうともしない碧眼の下で、朱唇がねじれて笑みを佩いた。

「下衆の勘ぐりだな」

辛辣な眼差しと、いっそ穏やかなほどの口調が、そぐわなかった。

「よもや、カトル、お前の口から、宮廷の九官鳥どものような言葉が、飛び出てくるとは思わなかったよ」

第八話 共犯 (2)

カトルは自分が触れてはいけないものに触れた事を知った。

はじめて見る皇女の碧眼に気おされて後ずさり、我知らず首を振った。

「そういう意味では……」

「残念だ。私は少々お前を買いかぶっていたらしい。それとも何か？　そういう風に人の心理を手前勝手に推し量り、型に押し込め理解した気になれば、お前にとつてこの事態は少しでも受け入れやすくなるのか？　お前自身のした事も？　忘れたわけではあるまい。私に道具を与えたのはお前だ。まさか自分が一方的に利用されたと思っただけでもないだろう？」

カトルは両の拳を握りしめる。知っている。分かっている。だから、ここにいるのだ。そもそも始め、自分が越権を犯しさえしなければ、犯し続ける事を選びさえしなければ、いや皇女に訳文を渡しさえしなければ……

皇女の手前勝手な詭弁を受け入れる意味ではないが、彼女の言った事を否定しきれないのも、また事実。罪はカトルにもある。

「なぜ鈴をつけるくらいなら、はじめから私に訳文を渡した？　信用していないというのなら、なぜ文書のみでは埋めきれぬ細部の技術的知識まで、望まれるままに私に与えた？　知らぬというのなら教えてやろうか？　私がいま禁術の事を知ったお前を前に、どうしてこれほど安心していられるのか。その訳を」

カトルの怯みに付け入るように、えぐり込むように皇女は言った。一言一言手応えを確かめるように。

皇女の言葉は的確にカトルの間隙に押し入り、その内部をかき乱した。絞り出すように口を開いた。

「……私達は、共犯者だと？」

「むろん、それもそうだ。私のした事をお前が告発出来ない理由

の一つは、そうすれば必然的にお前自身をした事も告白せざるをえないという事。言い換えれば保身の心理」

だが本当の理由は、と皇女は立ち上がりカトルに歩み寄った。小刻みに震える肩に手をかけ、視線をそらそうとするカトルを覗き込む。

「本当の理由は別のところにある。お前は単にあの文書に書かれていた禁術を実際に試したくて仕方がなかったんだ。理論は理論。いくら本に書いている事に信憑性があるうが実地の試験結果がなければ、そんなものは、しょせん絵物語に過ぎない。断言出来るよ、カトル。私がやらなければ、お前は自らを実験体になっていた。お前はただ知りたくて知りたくて仕方がしなかつたんだ。違うか？」

「それは違いますっ」

「いや違うわない」

突き刺すような碧の視線が、カトルに踏み込む。

「知ってるよ、カトル。お前にとって、それこそが全てだという事を。純粋な好奇心。知識欲。真実への志向。好きなように呼べばいい……いくら理性が声高に危険性を訴えても、お前にとって知りたいたいという衝動の前には、どのような倫理も道徳も色あせてしまう。良心の呵責に苛まされようと我が身の破滅を招こうと、お前が取るものはいつだって同じだ。富も名声も、地位も信頼も人の命も、その神聖な欲望の足下にはいと也容易く、ぬかずいてしまう」

「違うー！」

違う。確かに、自分は過ちを犯した。だが明確な意思があつて渡したわけじゃない。こうなる事など分かる筈もない。皇女がこころでするなど誰が予想できた？

だが本当に？　こうなる事を夢想だにしなかった、そう本当に言い切れるのか？

自分は本当に彼女がそうする筈はないと思つていたのか？

才知と美貌に輝く、天に一物も二物も与えられた幸せなラトギアの第一皇女。その闊達な笑顔、明晰な頭脳と軽妙な話し振り、きさ

くな人柄はカトルの羨望だった。

だがいま自分の前で牙をむく飢えた碧の目はどうだ。自分にはこれがずつと見えていなかったと？ 今の今まで見逃していた？

理知的な瞳の底に熾火のように燃える、底暗い情念の炎。

これに気付かなかったと？

「しよせん私達は同じ穴のムジナだ。私がお前を利用したように、お前も私を利用した」

「そうではありません。私は、ただ、ただ……」

皇女の言葉に盛られた毒は、確実にカトルに入り込み蝕んでいった。抗おうとした。必死に反論を探した。

だが、どこをどう探しても自分自身を納得させうるどんな答えも見つかりはしなかった。

「そうだ。お前は、ただ知りたかった。知りたいだけだった。だが恥じる事はない。欺瞞は大切だ。人は誰しも自らの良心と折り合いをつけねば生きてはゆけぬ。ただ、これだけは忘れるな。お前はすでに家族を捨て禁を犯した人間だ。私に禁術を使わせた結果産まれた潜在的な危険に多くを負う身だ。どのみち選ぶ道が同じなら、なぜ迷う？ 苦しむ？ 苦しもうが苦しむまいがお前の取る道はいつだって同じだったのに」

カトルは目を瞑った。

息のかかるほどの距離に、碧の目をした魔物がいる。彼女は傲慢で貪欲で孤独で、そしてそれだけに自分の欲求に忠実だ。

自分と周りを傷つける事をいとわない覚悟は、その一方で哀れなほどに一途であり、その無惨さがカトルに染みだした。

そこにいたのは、ある意味もつとも正直なカトル・マルグーだった。目的のためなら結局は全ての事を犠牲にする。

誰を巻き込もうと何を失おうと、本能のままにひた走る貪婪な怪物はカトルの中にもいた。

そうだ。自分もまた当の昔にその怪物に捕われていたのだろう。

泣いて引き止める妹も、取りすぎる病床の母も、暴力に頼って自

分を行かせまいとしたのんだくれの父も、自分は振りほどいた。彼等の末路は見えずぎるほど見えていたのに。

それから七年。ようやく仕送りが出来る程度の身分は得たが、とうの昔に母は死んでいたし、父は母が死んでから間もなく自殺したと聞く。

残された妹は娼館で働いていた。変わり果てた妹を前に何も言えなかったカトルに、彼女は七年分の恨みをぶつけんばかりに罵詈雑言をつくした。

何もかも、あんたのせいよ。どの面さげて私に会いに来れたの。そう叫んでカトルの胸につかみかかった。

胸元も露な娼婦の衣装、安手の装飾品、どぎつい化粧、やつれた顔、明け透けな口調。

胸を打つ彼女の拳よりもそれらの方がより痛かった。結局カトルは彼女が要求した、たった一つのもの、『金』を与え、去った。二度と会いたくない、だけれども仕送りだけはしろ、そういつた彼女の言葉を現在まで忠実に守りながら。

自分と皇女は同類だ。違いは自分はその怪物から目をそらし続けているというだけで。

「第一、こんな下らない事を長々と話すために、私に会い来たわけじゃないだろう？お前は、私の寿命や動機の事を心配するためにここまで来たわけじゃない。お前はただ結果を質しに来ただけだ。私という実験体を観察し、術の成否を問い質しにきただけだ」

彼女と話していると、自分が目をそらし続けてきた事を鼻先に突きつけられる。道徳心や耳障りのいい言葉の影にいた本当の自分。その誘惑の手招き。甘い、言葉。

「……召還は成功したよ。現れたのは一風変わった招獣だ。禁術を使った影響かも知れない」

禁術を使って成功した招獣の技。

不謹慎とそしられても仕方がない。この期に及んで胸を踊らせている自分。

矢継ぎ早に繰り出した質問の嵐を、かろうじて理性がおさえつけている。

その問いが保身の為ならば、こうまで罪悪感覚ええない。ごく自然に、ためらいもなく口にしていたに違いない。

だが気付いてしまかった。その問いこそが、答えそのものこそが自分の目的だったのだと。

いちど誘惑に負けてしまえば、きつともう止まらない。

「どうした？ 顔色が悪いぞ。お前が聞きたくないというのなら、こちらは無理には話さない。どちらにしろ、そろそろ私は行かねばならない」

「そんな、一方的につ、馬鹿を言わないでください。貴女のおっしゃることはともかく、話はまだすんでいない」

そうとも。まだ何も解決していない。

カトルの個人的な理由はさておき、今こんな風に尻切れ蜻蛉に放り出してしまえるような問題ではない。話し合う必要性があるのは確かだ。

「私も出立の準備や挨拶周りやらと、多忙の身だ。もう少しお前と別れを惜しみたいところが残念ながら、そうもゆかぬ。もしどうしても続きが聞きたいというのならラトギアまで私を訪うといい」
数秒の間、カトルは自分の耳を疑った。皇女の意味ありげな笑みが理解の後押しをする。

「……つまり、私にベルグを…祖国を捨てて貴女に仕えろと、そういう事ですか」

異物感が喉を塞いだ。

自分は今日まで、随分と愚かな思い違いをしていたらしい。

それまで自分と彼女の間にあつたと思っていた信頼関係。それ自体がただの勘違いでしかなかったと良く思い知らされた。

そして今その関係に完全な終止符がつけられ、新たな関係を結ぶかどうかの選択肢をつきつけられている。選ぶのはお前なのだ。

「お前の祖国はベルグではなくベルグに体现される『知の殿堂』」

の方だろうか？ ベルグほどでないにしろ、ラトギアにも相応の設備や人材はある。決して退屈はしないだろう」

「あなたという人は……」

「ではカトル、再会を心待ちにしている」

皇女は踵を返し一方的に会話の終わりをつけた。

カトルを置き去りにする規則的な足音は、まっすぐ礼拝堂の扉に向かっていく。

これより先はお前次第だと、そういつている。

共犯者としての関係を受け入れられるも受け入れられないも、国を捨てるも捨てないも、カトル自身の問題なのだと。

カトルは遠のいていく背中を睨みすえて、声を張り上げた。

「大した自信です。それが過信でないと、本気で私が貴女の元へ行くと、そう思ってたらっしゃるのですか？」

皇女の足が止まった。半身を返し、笑う。

「むろん無理強いはしない。私は個人の自由意志を尊重する平和主義者だ。だが……」

確信が、その笑みを彩る。

「お前は来るよ。絶対に」

扉の向こうに皇女の姿が消え、カトルは礼拝堂に取り残された。

第九話 無能 (1)

朝。鳥の囀り。顔を打つ朝光、肌を撫でていく清風。

眠りについていた自我の覚醒。夢の中に埋没していた自己という存在の認識に、今日もまた追いつかれる。

朝。

夢の終わり。一日の始まり。長い長い、一日の始まり。

ナリタカは目を開けた。

頭上には、見慣れた長方形の天井の代わりに、白地の布がかかっていた。視線を横にやると、柔らかい肌触りの布団の向こうに厳かに裾をなびかせる紗のカーテン……自分が天蓋つきのベッドに寝ているのだと気付くまで数秒かかった。

…ああ、そうか。

ナリタカは上半身を起こし、きしむ寝台から這い出した。

窓から吹き入る清涼な朝の空気が、寝汗をかいたナリタカの体に染み、ナリタカは誘われるように窓辺へと歩みよる。

窓枠にもたれかかり、朝の光に照らし出される眺望を眼下に発見して、ナリタカは小さく息を呑み、起き抜けの目を細めた。

白くきらめく波頭が眩しい港町…ギリシアの町並みはこんなだろうか。

地中海を思わせる白くて四角い感じの家々が連なり、港には帆船が幾艘も停泊がしている。右手には小高い丘の上に、他と一線を画する幾何学的な巨大建造物があり、何らかの宗教施設のような趣を呈していた。

(昨晚のアレは夢じゃなかったんだな)

それが喜ぶべき事なのか悲しむべき事なのか分からず、ナリタカはただ唇の端を自嘲に歪めた。

考えてみれば昨日から、こればかりだ。

窓を見てはここが異世界である事を再確認する。

だが今回ばかりは……異世界の印を発見する事は出来なかった。

昨晚ナリタカに異世界である事を照明して見せた巨大な月は、いまは姿形もない。代わりにあるのは太陽だ。少なくとも太陽に類似した物体が、見慣れぬ町並みを燦々と照らしていた。

月と違ってこの太陽は、ナリタカの想像する太陽とさして違って見えない。丸くて明るくて、直視すれば失明しそうなほど眩しい。

しかし太陽は変わらないが、世界はナリタカの知っているものではない。眼下に広がる光景は寝る前に見た夜景を昼に置き換えただけのようにだった。

夢じゃなかった。

落胆とも安堵ともつかぬ感情が、胸を撫で落ちていった。

元の世界　　まだそう呼ぶには抵抗を感じるが　　から突然こんな場所に連れて来られたというのに、自分は悲しむことも出来なければ、喜ぶこともできない。

元いた場所に帰りたいたいと思うこともなければ、眼前に広がる未知の世界に対する興味ももてない。ただ何か厄介ごとに巻き込まれたような倦怠感があるだけだ。

そんな自分がひどく空虚でつまらない人間に感じられて、心にかかった倦怠がいや増した。

その時だった。

突然背後から降って沸いた声に、ナリタカの思考は遮られた。

「どうやら招獣というのは、窓辺にすり寄っては、たそがれる習性があるらしいな」

振り向くまでもなく知っていた。

そこに立っているのは、今自分がここでこうしている全ての元凶にして、自分の『主人』であるところのイリユーシャ・フォン・リーエンヴァイン皇女その人に違いなかった。

いつの間にか部屋に入ってきた皇女は、腕を組んで柱にもたれかかっている。

一体いつからそうして観察していたのか。入ってきたなら入ってきたで、声をかけるのが最低限の礼儀というものではないのだろうか。

ナリタカの無言の非難に気付いているのか、いないのか、イリユーシャ皇女は、相変わらずの傍若無人ぶりを披露する。

「扉の開く音にも気付かないとは、耳に問題でもあるのか？ 今度、医者に診てもらおう事でしょう」

なるほど。彼女が主人で自分がその飼い犬である以上、人間に払うような礼儀は必要ないという事か。

「随分とお早いお目覚めだな。どうだ？ よく眠れたか？」

「……別に。悪くはありませんでしたよ。囚われの身としては」
卑屈な嫌味で答えると、皇女殿下サマは唇の端で笑った。姫君と
いうよりは、喰えない悪役の表情だ。

なんだろう。この違和感は。

そも、お姫様などという人種は、絹のドレスとか高い宝石とかで
身を飾って、スプーンより重たいものを持った事はありませんとい
う顔をしているものではないか。そう、男の庇護欲をかきたてるよ
うな。

しかし目の前の皇女はあらゆる面で、そのナリタカ的ステレオタ
イプを裏切っている。まず、民族衣装のようなその服装だが、スカ
ートではなく、どちらかといえば身軽そうなパンツであり、絹のよ
うに光沢のある素材ではない。

それにナリタカにあてがわれたものと形状的にそう違わない点を
考えると、彼女が男物を着ているか、ナリタカが女物を着ているか、
そもそもここいらでは服装による性別の差別化があまり進んでいな
いのかの三点に絞られてくる。

第二に、銀のさじをくわえて生まれ来た筈の姫君の腰には、細
身ながらも装飾を排した剣がぶらさがっている。おてんば姫の洒落
つ気とも解釈できるが、すくなくともスプーンよりは重たいことは
確かだ。

第三に、自分を監禁だか軟禁だかしている人間に庇護欲を感じる
ほどの包容力など、残念ながらナリタカは持ち合わせていない。

「少しは、落ち着いたように見える。大した進歩だ。それとも開き直っただけか？ いずれにせよ、泣いたりわめいたりされるよりは、こちらとしても話やすい。結構な話だ。三日の眠りは伊達ではなかったか」

「三日？」驚いた。「まさか、あれから三日も立ってるんですか？」

「その様子を見ると、我が招獣殿の世界でも、少々ながい睡眠時間であったようだ。このまま半年も一年も眠ったままでいられたら、どうしようかと心配していた所だ」

三日間も自分は眠っていたというのか？道理で体に力が入らない筈だ。

「時にナリタカ、お前には山と聞きたい事がある。お前にしてもそれは同様だろう。順々に説明するとして、先に一つだけ言っておく」

ナリタカは無言でその先を待った。それに従順と解釈したのか、皇女は言葉をつなげる。

「私が命ずる事に關して、お前に拒絶する権利はない。私はお前の主人であり、お前は私の所有物だからだ。衣食住に留まらず、お前がそうして息をしていられる事さえ、私の保護下にあるからだという事を忘れるな」

保護…ものはいよいよだとナリタカは思った。果たして、誘拐犯が攫って来た被害者に食費がかさむと恩を着せるのと、一体どれだけの違いがあるだろう。

「逆らえば、命の保証はしないとでも？」
ふと思いついたことを聞いてみる。

「良く分かっているじゃないか」
どこまで本気なのか、いまいち読めない表情で彼女は言った。

前言は撤回しなければならぬ。「喰えない悪役の表情」ではなく、むしろ真正銘、喰えない悪役だ。

一目惚れされてもおかしくない外見と、百年の恋も冷める中身。そう例えれば多少かわいくも聞こえるが、実物を前にして、そんな境地には立てる人間は一握りだろう。少なくとも、それが自分ではない事は確かだった。

「お前に招獣としての適性が認められなかった場合も、それは同様な。能力を隠したり、出し惜しみするのなら、その辺をよく吟味してからにしておけ」

ナリタカは肩をすくめた。

「…火を噴いたり、魔法を使って空を飛ぶのが能力だというのなら、僕はまごうことなき無能力者です」

無能。

自分の放った言葉の響きに触発されてナリタカは笑った。
言及されている『能力』の種類こそ違えども、こんな所に来てまで『能力』を求められ、変わらずに失望でしか報いることが出来ない自分が、なんだかおかしかった。

第九話 無能 (2)

自分が無能なのは別段、皇女の求める能力に限らない。

勉強でも体育でも、自分が他より抜きん出たことなど、幼稚園からこのかた一度だつてなかったのだから。むしろ皆に置いていかれないよう付いていくのに、いつも青息吐息だった。

私立の小学校のカリキュラム。兄も通つたのだという進学塾。

睡眠をけずり、がり勉強し、両親の期待に応えようと、いじらしい努力を重ねた時期もあった。

それでも学年の上位十番に入ることさえ出来ないのだと知った時は正直、自分は欠陥人間ではないのかと疑つたものだ。DNAの一部にどこか欠損があつて、それが自分の知的能力を阻害しているのではないかと。

それでも思わなければ、とても納得できるものではなかった。

兄の辿つた足跡をそのまま踏襲したのだ、自分は。

努力だつて出し惜しみはしなかった。

それなのに、この違いは…兄と自分の間に横たわる、この格差は一体なんなのだ、と。

共有している筈の四分の一のDNAは全て自分においては劣性遺伝子なのか、それとも兄において劣性なのか、などと訳の分からぬい事を真剣に悩んだ。

そう、後にして思えば兄は出来が良く、自分がそうではなかったというだけの話だ。だが当時は、その簡単な事実を受け入れがたかった。

機会均等という言葉があるが、あれは平等でも何でも無い。なぜなら機会均等は、能力の不均等の上に成り立っているからだ。能力

に開きのあるもの同士が同じ土俵に上がることの一体どこが平等だというのだろう。

人は不平等に生まれ付いているというのに、なぜ生まれ落ちた後は『平等』に扱われるのだろうか。別に僕は共産主義者ではないが、機会均等の一体どこが結果均等よりも平等なのか、理解に苦しむときがある。

人は努力の価値を説きたがるが、世の中には努力だけでは埋まりようのない溝が存在する。兄のような宇宙人や、弟のように、あくまで自分のルールで生きていける人間が存在するのがその良い証拠だ。

出来の良い長男を持った両親は最初こそ、それなりの期待をナリタカにかけていたが、いつしかそうする無駄を悟ったようだった。ナリタカの下から追い上げてきた弟に新しい希望の芽を見つけてからは、なおさらに。

不毛な期待に神経をすり減らすことをやめた母は、以前よりナリタカに甘くなった。優しくなったと言ってもいい。

だが、それが見捨てられるのと一体どう違うのか、ナリタカには分からなかった。

ナリタカ、お前のいい所は努力を惜しまないところよ。

とってつけたような褒め言葉。他に褒める所がないのか。そもそも褒めているつもりなのだろうか。詰め込み教育から、ゆとり教育に宗旨変えか？

でもナリタカ、お前はお前のペースでやっていけばいいんじゃないかしら。

僕は産まれてこの方、あんた達のペースでやってきたんじゃない

か。あんた達が敷いたレールの上で、あんた達に出される障害物をクリアするのに必死で、ただそれだけだった。なのにいまさら僕のペースで？

教えてよ。僕のペースって一体どんなペース？

もう少し肩の力を抜いてもいいんじゃないかしら？

肩の力を抜いたら、あっという間に置き去りにされる。追いつけなくなる。

そんなに頑張らなくても…

『頑張つて』と言つたのはあなたじゃないか？ どうしていまさら違つことを言う？

お母さん達の期待に応えようなんて思わなくていいから。

見捨てられた、と感じた瞬間。

あんまり、お兄ちゃんの事、プレッシャーに感じなくていいからね。ナリタカはナリタカなんだから。お前に価値はない、と言われた気がした。

「…ナリタカ？ どうした？ 顔色が悪いな。やはり医師に

自分を飼い犬扱いしてはばからない女の声……でも、じゃあ、元いた世界では自分はそうではなかったのか？ 飼い犬ではなかったのか？

ご褒美にありつくために、撫でてもらうために、芸をする飼い犬ではなかったのか？

ナリタカは笑った。顔を上げ、訝しげな顔をした自分の『主人』を見返す。

「だから僕は招獣として無能という事になります」

自分で自分を否定して見せることには、心を引き剥がされるような痛みと、そして丁度それと同量の快感が潜んでいる。

ナリタカは、その痛みを抱え、熱にうながされ、繰り返し反芻する。

「僕に価値はない」

認めてしまえ。そうだ。相手に否定される前に、自分で認めてしまえば良かったんだ。

「僕には、あなたの期待に沿うことは出来そうもありません」

僕は、あなた達の期待に答えることが出来なかった。

「魔法一つ使えない僕は、貴女にとって無用の人間のはずです」

あなた達にとって僕という人間は無価値だ。

「でもだったら、どうします？僕を…」

僕を否定した。

失望と哀れみを等分に含んだ、その言葉で、その口で、その指で、その目で

「殺しますか？」

あなた達は、僕を殺していった。

第九話 無能 (3)

僕を殺しますか？

そういつたナリタカの声に普通でないものを感じたのか、イリユーシャは少し驚いたように眉を上げ、次いで探るように潜めた。

「殺されたいのか？」

「……なんで、そうなるんですか？」

「そういつている風に聞こえた」

心中をおしはかるような視線を受けて、ナリタカは反射的に目を伏せる。

「別に。あなたの意図を確認しておこうと思っただけです。もっとも、僕に対して殺す殺さないの脅迫が無意味なのは確かですが」

気配と足音で皇女が近づいてくるのが分かった。やがて伏せられたナリタカの世界の中に、皇女の足が止まる。

「死ぬのが怖くないとも言っただけか？」

至近距離に相手の気配を感じる。顔を上げれば、目線の位置に皇女の顔があるだろう。それですます顔が上がられなくなった。

「だったらどうだって言うんですか？」

声が上がって、悲鳴のように響いた。

「いや、うらやましいと思ってな」イリユーシャは息をついた。

「……私は怖い」

「……」

「私は死ぬのが怖い」

自嘲気味に皇女は続けた。

「怖くて怖くて、たまらない。何もなさぬまま……何者でもないまま、死ぬのが怖い。誰にも価値を認められぬまま、認めさせることが出来ぬまま死んでいくのが」

怖い？

ナリタカは拳を握り締める。

誰にも価値を認められぬまま

目の前の傲岸不遜な皇女には、およそ似合わない言葉だと思った。それは、そんな言葉は、仮にも皇女という大仰な肩書きを持つ人間のものなどではない。

忠実な部下と広大な屋敷とを所有し、辺りを払うような存在感と容姿と、自信に満ち溢れた皇女の……およそ劣等感とは無縁な人生を送ってきただろう人間のものではならぬ。

それはナリタカのものだ。

「私が死んで喝采を上げるだろう連中を喜ばせてやる義理もないしな」

皮肉のつもりだったのかもしれないが、その声は皮肉というには少々余裕を欠いていたかもしれない。

「侮られ、かえりみられないまま死んだら、それは相手が正しかったと肯定するようなものだ。年少だった私を軽んじた人間、私を手駒として扱い、しかも下手をうって何もかもを台無しにした人間、私を無視し疎んじ、遠ざけようとした人間……」

平坦な声の底に小さな亀裂がいくつも生じ、そこから何かが沁み出していく。

痛みと熱をともなったそれは、ぽつぽつと落ちては心の底に溜まっていたいき、いつしか向かう場所を求めて流れ出す。

いまはまだ、かぼそい細流であっても、いつか、それは一つの大きな流れに育っていくだろう。そして、いつかきつと、そのうねりは

ナリタカには分かる。それはかつて、ナリタカの感じた流れでもあったから。感じて、そして身をゆだねることが出来なかった流れだったから。

不公平だと思った。こんなのはとても不公平だ。

なぜ自分と同じものをこの女が持っている？　そしてなぜ、彼女と同じものを自分は持っていない？

流れの先にあるものが何であれ、それは少なくとも停滞の淀みではない。救済であれ、破滅であれ、それはきつと何かを変える力だ。今の自分ではない自分をつくっていく力だ。

「見返してやりたい」

皇女は言う。ナリタカの羨望に気付きもせず。

「一人残らず、見返してやる。後悔させてやる」

そんな風に思えたなら、何かが変わっていただろうか？　屋上から飛び降りずに生きていけただろうか？　自分自身を嫌いにならずに済んだらどうか？

「振り向かせてやる。私を見せてやる、あの目に。もう二度と背中など向けさせない。視線をそらさせたりなどしない……」

ナリタカは顔を上げた。

きりもむような碧の眼差しが、ナリタカを通し、その先にいる誰かを見つめていた。おそらくは振り向かせたい誰かの背中を。

壊れんばかりに張り詰めた瞳に浮かぶ光を、強さと呼ぶべきか弱さと呼ぶべきか、ナリタカには判断できない。

ただその碧の瞳に胸をつかれ、目を奪われて離せなかった。

その眼差しは、立ち止まり座り込み、淀よどんでいく事しか出来なかった自分とは、あまりにも対照的だった。

皇女の瞳がふつと緩み、紅い唇が最初と同じシニカルな笑みを形作る。

「なんて、な。そういう感傷も生きていく原動力になりうるという話だ……だがナリタカ、お前にはないのか？　生きていく理由は、つまり、やりたい事、心配してくれる家族、見返してやりたい人間、

そういったものは？」

その問いの残酷さに気付いているのかいないのか、皇女は突如として矛先をナリタカに向けた。

そしてナリタカは沈黙でしか答えられない。拳を握り締める手に自然、力がこもった。

「まあ、いいさ」

皇女は肩をすくめる。

「死を畏れぬ招獣というなら、それはそれで結構なことだ。それに元の世界に対する、しがらみなど邪魔なだけだろうしな」

「……僕は招獣なんていうものじゃない」

否定しなければならぬ気がした。ただ否定するためだけに否定した。何かを。彼女の言葉を。主張を。存在を。その一端なりとでも否定するために。

「僕は招獣なんかじゃない」

「まだ言うか」

「別に“僕は”なんでも構わない。後悔するのは“あなた”だから言ってるんだ」

皇女はナリタカの主張を鼻で笑った。

「なるほど“私”のためにか？ 思いやりに溢れる良い言葉だな。それで？ 私は主人思いの招獣を持ったと喜ばしいのか？」

「……勝手に期待されて、勝手に失望されるのは沢山ですから」

「ほう、そんなに失望されてばかりの人生だったのか？」

「あなたこそ、期待すらされない人生だったんですか？」

ナリタカと皇女はしばし沈黙の間で対峙した。

「……何か、いろいろと勘違いしているようだから言うておく」
温度を下げた碧の視線が、絶対零度の冷やかさでナリタカに通告する。

「お前の自己申告は信用もされなければ、尊重もされない。お前が招獣がどうかの判断はあくまでもこちらが下す。お前を生かすか

殺すかの決定も同じだ」

「なら、さつさと判断して決定したらどうですか？ 適正検査でも人間ドックでも何でもして、調べてみればいい」

こんな茶番はもうたくさんだ。

妙な誤解は早くとして、馬鹿な期待はそうそうに投げ捨ててもらわねばならない。それこそがお互いのためというものだ。期待が浅いうちの方が、失望も浅くてすむだろうから。

母親が自分を見たのと同じ目で、この碧の目に見られたくはない。だから。

いつになく好戦的な表情をナリタカは作って浮かべた。

「それとも皇女様が本当に嫌なのは、僕が招獣でないと分かってしまう事のほうですか？ 自分が失敗したと認めたくないんですか？」

宣戦布告。挑発が図に当たることを、ナリタカは信じて疑わなかった。

理屈ではなく、より直感の部分。本能と言い換えてもいい……知っていたのだ。

ナリタカの存在の奥深くに、皇女と共有する部分があつて、それがそのときは、何をどう言えば、相手を刺激できるかを知っていた。

「怖いんですか？ 自分が術士として無能だと認めるのが」

皇女は笑った。無表情な笑いの下に押さえつけた感情が、気配だけ匂いたつような凄みのある笑いだった。

「……いいだろう。発言権を認めた覚えはないが、飼い犬みずから芸をしたいと言っているんだ。付き合つてやるのも一興だ。付いて来い、ナリタカ」

皇女は背中を向ける。扉の引き手に手をかけたところで、立ちつくしたまま動かないナリタカを振り返る。

「お前の望みどおりにしてやると言っているんだ。少しばかり試し

「てみることにしようじゃないか」

「僕の招獣としての力をですか？」

皇女は首を振った。

「お前と、そして私の“無能”ぶりを」

第九話 無能 (4)

「好きな得物をとれ」

皇女は顎をしゃくって、壁にずらりと並ぶ武器を示して見せた。

剣、大剣、フレイル、槍、手斧、クロスボウ…… かるうじて、名前を類推できるものだけでも枚挙にいとまがなく、しかもサイズや仕様の違うものを含めると、一体どれだけの武器がこの武器庫におさめられているのかという疑問が湧いてくる。戦争でも始めるつもりか？

「素手で戦う自信があるならいいが、そうでないなら武器を選べ」

「武器を選んで何をするんですか？」

「適正検査だ。自分で言い出しておいてもう忘れたか？」

「招獣としての能力が、武器を使う事と何か関係があるんですか？」

「さあな。何事もやってみない事にはわからない」

この時までにはただ漠然と、リトマス試験紙のように、『招獣』でないか否かを判定できるテストがあるのではないかと考えていた。しかし、どうやらその考えは甘すぎたらしい。

「現状ではあらゆる可能性をしらみ潰しに確かめて見る必要がある。お前は人間の姿をしているのだから、その能力の特性が人間の形状に則したものでないと言い切れまい」

『人間の姿』、『人間の形状』…… そんな言葉を口にするイリユーシャ皇女の顔はいたって真面目であり、ナリタカは笑えなかった。

あらゆる可能性と彼女はいつたが、なるほど。つまりは、自分が本当に招獣でないと『彼女』が納得しあきらめるまで、この茶番は続くと、そういうことか。やはり笑えない。

「いいましたよね。僕は武道なんてかじった事も

」

「なら、剣にしておくといい。両手剣と片手剣、どちらがいい？
ああ、でもお前じゃ、片手剣でも両手でないと扱えなさそうだな。
しかし招獣だけに万が一の可能性も考慮して、片手半剣にしておくか？」

イリユーシヤは壁にかかった一振りの剣を取って、ナリタカに放ってよこした。ずしりとした手ごたえに、反射的に受け取ったナリタカは危うく取りこぼしそうになった。

皇女の叱責が飛んだ。

「とり扱いには注意しろ。その一振りは、お前を奴隷商人に十回売り飛ばしても買えない品だ」

その貴重な一振りを投げてよこした当人は、もう用は済んだとばかりに武器庫から出て行く。ナリタカが後ろからついてくるのを、疑いもしない様子だ。

門番にねぎらいの声をかけて武器庫を後にする主人の背中を見ながら、よほどそのまま一人で行かせてやろうかとも思ったが、結局ナリタカは後を追った。両手には、渡されたばかりの『片手半剣』とやらがある。

「ちよつと待ってくださいよ。まさか適正検査って、この剣を使って僕に戦えっていうことじゃ」

「剣を使って、ままごとでもするつもりだったのか？ お前は」
要するに『馬鹿か、お前は』と言われたわけだが、ナリタカに腹を立てている余裕はなかった。歩調の早い主人においすがって、訴える。

「剣なんて使えません」

「それはさつき聞いた。その前にも聞いたな。お前と違って私は一度きけば分かるくらいの頭は持っている」

すでに釘を刺されたように、拒否権はないらしい。しかし尚もナリタカは食い下がった。今度は妥協案で。

「なにも真剣でなくとも……せめて木刀でも」

「真剣ではいけない理由を言ってみろ」

「……危険、だから？」

我ながら、なんとも間の抜けた答えだった。案の定、皇女はやれやれとばかりに首を振った。

「話にならん」

だいたい、と彼女は振り返り、ナリタカの怯懦きょうたをあざ笑うかのように言った。

「死ぬのは怖くないのに、真剣は怖いのか？」

皇女のからかいの視線をナリタカは睨み返した。

「……それとこれとは話が別です。それに召還術だかなんだかも満足に成功させられない三流術士のおもちゃにされるのは正直、怖いですね」

「なるほど。命が惜しくないというのは本当らしいな。己の命を握っているものにたいして挑発とは大した度胸だ。それが口先だけでない事を願っているよ。お互いのために」

「僕もさつきからずっと願ってますよ。あなたに自分の失敗をいさぎよく認められる度量がそなわっていてくれたらと」

嫌味の応酬は、しかし中庭に出たところで終わった。

皇女は中庭に開けた場所を適当にみつくろつと、腰に佩いていた己の長剣を抜き払って、ナリタカにも命じた。

「剣を抜け、ナリタカ」

「え？」

ちよつと待て。まさか自分の相手は……

「言わなかったか？ 付き合つてやるのも一興だと。私みずからお前の相手をしてやると言っているんだ」

皇女は五歩ほど距離をとり、ナリタカに正対する。

身を低くし、剣を構え、とまどうナリタカに切っ先を向ける。

「安心しろ。私の剣の腕は一流だ」

第九話 無能 (4) (後書き)

怯懦きよつた - 臆病なこと。

第十話 擾乱 (1)

「ちよつと待つてください!」

ナリタカは叫んだ。

「何を待つ? 待てばお前が今よりも招獣らしくなるとでも言うのか?」

「そういう事じゃなくて……剣を習うのはともかく、相手があなたというのは、その……」

万が一にでも女子の体に傷をつけたとあつては責任問題だ。たとえ相手が好意などいただきよのない鼻持ちならない相手であったとしても、それとこれとは別問題のはずである。

しかし皇女は意外な事でも聞いたという風に、ナリタカの反応をせせら笑った。

「習う? 何を勘違いしている。これは剣術指南などではない。立会いでお前の力を試してやると言っているんだ。私がなぜ、お前に手取り足取り剣の指導をしてやらねばならん」

「……だつたら尚更のこと。もしあなたが怪我でもしたら」
どんな目に合わされるか……という事もあるが。

武器はおるか包丁さえ振るつたことのないナリタカが真剣をあつかえば、力加減も何もあつた話ではない。

銃の扱い方を知らない素人が、あやまって人を撃つてしまう……というようなことが起こらないとも限らない。相手がその道をきわめた達人ならまだしも、目の前にいる人間がいくら剣の鍛錬をつんでいたとしても十代半ばの女の子であり、またその自己申告は『二流』なのだから。

「その、正直な話、女性相手に剣をふるうのには抵抗があります」

「女だから、ね」

イリユーシャは苛立たしげに息をつき、かまえた剣先をわずかに下げた。

「お前は虫を踏みつぶすとき、それがメスかオスか考えるか？」

「は？」

「つまりはそういう事だ。招獣は人間ではない。どこかこの世界の存在ですらない。お前と私は異なる種族系統に属するものだ。なら、その獣が、さかしらに人間の女を『女性』などと語ったりするな。招獣らしくない以前の問題だ。虫唾がはしる」

おそろしく奇怪な論理によって、ナリタカは侮辱された。

「あの、だから僕は招獣じゃないと……」

一度聞いた事は覚えているといったのはどこの誰だ？

「お前の泣き言にはもう聞きあきた。私に刃を向けられないというなら、そのまま突っ立っている。出血多量の致死量も人間と同じかどうか調べてみようじゃないか」

皇女は剣を構えなおす。立ち居地がわずかに前のめる。体重がかかる。踏み切る。

「ちよっ」

ギインと鈍い音が至近距離にはじけた。

一瞬にして距離をつめ、ナリタカを襲った皇女の剣撃。

めつくらぼつに剣を鞘ごと顔の前に押し出し、大上段からの一撃をかるうじて受け止めたナリタカだったが、受け止める際に腰がひけて地面に膝をついてしまった。

彼我の膂力じりきの差はわからないが、体重が乗っている分だけ上から押している皇女に分があった。

じょじょに鬨せめぎあいせめいで押し切られていく。剣の切っ先が、上からじりじりと眼前に迫ってくる。

「おいおい」

刃ごしに、ややあきれ気味の表情で皇女は言った。

「大上段からの大振りを真つ向から受けてどうするんだ？ こういう時は、かわすか流すかだろっ」

「だから剣は初めてだつて言っ」

その瞬間、一気に上からの圧力が消え、ナリタカは勢いあまって前につんのめった。

直後、くの字になった腹部をえぐるような衝撃がおそった。目の奥が真つ赤になり、呼吸が止まる。

ナリタカは吹っ飛んで、地面に転がった。

「……ぐっ……」

一瞬、意識が飛んでいたように思う。ナリタカの意識を呼び戻したものは、痛覚だった。

はらわたを太い火箸でえぐられるような痛み。全身の毛穴からぶわりと汗が吹きで、息することもままならない。痛みのあまり、そこいら中を転げまわった。

恐怖というよりは衝撃に、涙が流れた。何も見えない。

喉の奥、腹の底から逆流してくる暴力的なまでの衝動に、ナリタカはさらに深く体を折った。しかし三日間、飲まず食わずだった胃に内容物はのこっていない。

地面についた両手の先、咳き込み、むせ返りながら、ナリタカは胃液をまき散らした。

吐くだけ吐くと、ようやく視界が戻ってきた。ぼやけた世界の中心、ナリタカの鼻先にたたずむ皇女の両足。皮の長靴。

それを見て遅ればせら理解する。そうだ。この長靴だ。

無防備だった腹にえぐった容赦ない蹴りが、ナリタカを地面に沈めた。

「胃液を吐いたか……我が招獣殿も人と同様、胃の中に酸を隠し持っているらしい……良かったな。これでお前の、自分はただの人だという主張の根拠が、またひとつ増したわけだ」

首筋に刃がおりてくる。

首に巻かれた包帯に、ぴりと鋭利な感覚が食い込み、新たな血でナリタカの首筋を汚した。

「立て、ナリタカ」

ナリタカの喉に刃をつきつけたまま平坦な声が再度命じる。

「立って剣をとれ」

「いやだ。僕には出来ない」

そうだ。無理に決まっている。土台むりな話なんだ。武器をとって戦うなんて芸当、僕に出来るはずもないじゃないか。

「なぜやってみる前から、そう分かる？」

でも本気になって試して、それでも駄目だったら？　しゃにむに頑張った勉強でも、やはり母を失望させてしまったように。自分をさらけ出し、出し尽くしたその後で、全否定されるのはつらすぎる。

自衛に閉ざされた心は、もう二度とは同じ傷をつけられまいと殻を固くする。

「無理なんだ」

「立たなければ、このまま首を落とすまでだ。実戦でもないお遊びの立ち会いで死ぬような招獣ならハナから生かしておく価値もない。ましてや、真剣が怖くて持てない招獣など話にもならん。それともお前は自分が『大事な招獣』だからと、こちらが甘く出るとでも期待していたか？」

期待などしていない。彼女の言う招獣がどんな代物であれ、それは自分ではない。なぜなら、自分は誰かに望まれるような存在では

ない。

口腔から地面にむかって垂れ下がる唾液と胃液の混合物をナリタ力は見つめる。

「……気に入らないなら、このまま殺せばいい。どうせこんな命死んで当然だったんだ。惜しくなんかない」

ぎゅつと目をつむる。怯えるな。震えるな。惑うな。自分自身に言い聞かせる。この期におよんで動じたりするな。

ずっと前にくるべきだったものが、少し遅れてやってきただけの話だ。一度は通った道をまた通るだけだ。だから……

「なるほどね。命が惜しくない、か。それがお前が死を恐れない本当の理由か？」

首筋の刃がまた少し食い込み、ナリタ力の首筋を赤く汚した。

肌が粟立ち、生理的な嫌悪に体がこわばる。抑えようとすればするほど、体が震えだす。己自身のていたらくに泣きたくなる。

「……哀れだな」

一度は死んだ身なのに、怯えるなんて変だ。傷つくなんて変だ。

「お前は弱い。剣技がどうだという話じゃない。ただどうしようもなく弱い。招獣以前の問題として」

ナリタ力は唇を噛む。

もし殺すというのなら、なぜ一思いに殺してくれない？ どうでもいい会話を、分かりきった事実の確認を、惨めな自分自身を曝け出すことをナリタ力に迫る？

「お前はなにも人を傷つけるのが怖い訳ではない。なにか、それ以前のところでお前は怯えている。武器が扱えないとか剣技が下手だとか、そういう段階の話ですらない」

「……」

「死を恐れぬと言いつつ、剣を持たせれば腰が引ける。自分は無理矢理つれてこられたとばかりに被害者面をする割に、不平不満を

垂れ流すのだけは一人前。いまだって、首に刃をつきつられて震えているくせに命が惜しくないと虚勢をはる。お前の言動は矛盾だらけだ」

皇女の一言一言は、遠慮呵責なくナリタカの傷に押し入り、その中心に爪をたてる。

「死ぬのが怖くない、か。それはそうだろうな。生きることを選んだ者に、死ぬ事など出来るはずもない」

「ーえぐられる。」

知らず、指がかぎ爪の形をとって地面を掻いた。

「……る、さい」

「お前は何も死ぬのが怖くないわけではない。ただ」

「うるさいっ！」

叫び、頭上を振り仰ぐと、静かに自分を見下ろす碧の瞳があった。

「ただ生きるのが怖いだけだ」

「あんたにつ……！」

心が、ばらばらになっていく。自分という人間が丸ごとさらけ出され、千々に破れていくような狂騒。

なのにその諸悪の根源である皇女は、そよとも揺らがないまっすぐな瞳でナリタカを見下ろしているのだ。

「あんたに何が分かる？ 僕の何が分かる？ あんたはいいよな

っ！ 仮にも皇女さまだ。左団扇ひだりうちわの王侯貴族、こんなでかい屋敷に住んで大勢の人間にかしづかれ、もてはやされて暮らしをしてきた人間に僕の気持ちがあつてたまるか！？ 何一つ不自由なく育ってきた、あんたなんかにつ」

「……不自由なく、か」

自嘲気味に笑みを刻む皇女を、ナリタカはキツと睨みあげる。違
うとでもいうのか。

「そうさ。あなたは恵まれている。恵まれすぎている。身分とか
財産とか、そういうことだけじゃない。あなたは……僕とは違う」
資質、才能、地位。そして、心の強さも。何もかもが残酷なほど
に違う。皇女は“持っている”側の人間だ。彼女を見てると兄を思
い出す。その背中を追いかけていた頃の苦しさを思い出す。

「不公平じゃないか。僕だって、あなたみたいだったら、こんな
風にはならなかった」

劣等感も嫉妬も、もう隠さない。自分を飾る必要などない。醜い
もの全部さらけ出して、目の前の人間に叩き付けてやればいい。

「努力しても努力しても、なお届かない事があるなんて気づか
ずにすんだ。誰かに嫉妬することなんかなかった。こんな惨めな気
持ち、こんな醜い自分、知らずにすんだ」

怒鳴り声が途中から嗚咽へと代わり、ナリタカの頬を熱い液体で
濡らした。

「一体お前がなんの事を話しているのか良く分からないが……」
皇女は浅く息をついた。「そんな風に自分を哀れんでみせても状況
は良くなりはない」

慰めるでもなく責めるでもないその言い様は、いつそうナリタカ
を苛立たせた。

皇女は地べたに這いつくばったナリタカを見ているだけなのだ。
立ち上がらせるために手を伸ばしてもくれなければ、切り捨てても
くれない。

「それに”届かない”と判断して諦めたのはお前ではないのか？
届かなかったと結論を下すことが出来るのは、死ぬまでその目標
のために誠心したものだ」

「……死ぬまで、だって？」

胃の腑の底から暴力的なまでの笑いの衝動が突き上げてくる。ナリタカはそれにあらがわなかった。

声をはなつて笑う。今はそうする事に快感を覚えた。いままでさんざん溜め込み、くすぶらせてきた鬱屈を外界に向けて解放する、かつてないほどの爽快感。

「何がおかしい？」

そうだ。何もかも、ぶちまけてやればいい。一切合切を叩きつけて修復不可能にしてしまえばいい。終わりにしてしまえばいい。この皇女との関係性もこの堂々巡りの葛藤も、全部。

「皇女さま、僕は一度死んでいるんですよ。いやもしかしたら今だって死んでいるのかもしれない。だって僕は自殺したんだから」

「自殺？」

いぶかし気な問いに、ナリタカは嬉々としてうなずいた。

「ええそうです。終わりにしてやっただです。人生とか目的とか、届くとか届かないとか……」

劣等と無力。臆病と狡猾。酷薄、姑息、卑劣……自分を表す二字熟語にはナリタカはことかかない。

それらはいまやナリタカを表す記号であり、ナリタカという人格を構成する部分である。しかしその全ては……自分という個人のアイデンティティは、あの日の行為に集約され、“あいつ”の視線によって表しつくされてしまった気がする。

ナリタカの行為に怒るでもなく、ののしるでもなく、ただただ哀れみだけを宿した、あの眼差し。ナリタカに己のおかした罪の重さを、その醜悪さを思い知らせた。自分のような人間に価値はないと理解させた。

「そういうの全部っ、終わりにしてやっただ……ざまあみろだ！」

いい終え肩で息をする。涙がとめどもなく流れて頬をつたい落ちていった。

「終わりにしたはずだったのに、あなたが……」

冷えた汗が体と心を冷ましていく。

「どうしてあなたは僕なんかを呼んだんだ。あなたが僕を呼んだから、だから僕は……」

うつむき、消えているようにささやくナリタカから皇女は剣を下ろした。

「ナリタカ、私は」

その続きの言葉を皇女が言うことも、ナリタカが聞く事もなかった。

「イリユーシャ様っ！」

叫び、まるぶように駆けてきた侍女アリシアが異変の到来を告げた。

「大変ですっ！ 正門につ、正門に武装した市民が大挙しておしかけてきています」

第十話 擾乱 (1) (後書き)

擾乱じょうらん— 騒乱。あるいは事件などが起こって、社会、国などの秩序がみだれること。

第十話 擾乱 (2)

「ベルグ王立学院は異端の殿堂だっ！」

「天地創造の技を真似る試み、それすなわち神を擬する行為なり！ 魔法しかり、数学しかり、地理しかり、測量しかり、物理しかり。全ては自らを神に近づけようとする、人の奢りが編み出した悪魔の技なり」

「自然を曲げ、神の理にそむく異端者たちに、神の裁きを！ 悪魔の技をならう全ての者たちに、死の鉄槌を！」

「我々は、王立学院の存在意義に異を唱えるものなり！」

「王は王立学院を私的に占有し、議会に背き、市民の声をないがしろにしている！ なぜか？ 外国の貴族どもに尻尾をふるい、そのお遊戯の場を守るためにだ！」

集団の音頭をとる一際たかい喚声上がるたび、人々の集団は賛同に湧き、ときの声を上げる。

「そうだ、そうだ！ 王立学院なんて糞の役にもたたねえもん、ぶっ壊しちまえ」

「この世は神様が作ったんだ。それを無視して自分たちの勝手に操ろうとするなんて、ふてえ考えだ。教皇様がゆるしても、ワシが許さなねえ」

「貴族のぼんぼん共の優雅なお勉強のために、なんで俺らが汗水たらして働かなきゃならん」

「史書編纂なんて糞食らえ！ 賦役も税金も糞食らえだ！ 改築がしたいなら、てめえらで働いてみるってんだ」

「諸君！ この様な横暴がまかり通っていいのか！？ この様な不信心がまかり通っていいのか！？」

「いいわけねえ!!」

「殺せ!」

「壊せっ」

「学院を打ち壊せ! 王を玉座から引き摺り下ろせ! 貴族どもに目にも物を見せてやるんだ!」

「おお!」

「やれっ」

「やっちまえ!」

皇女邸の正門で、口々に罵声をあげる集団の熱気はすさまじかった。衛兵達と皇女邸の堅固な壁がかるうじて彼等を屋敷の外に押しとどめているものの、ひとたび門が打ち破られてしまえば、どうなるか知れたものではなかった。

それに、いかに増強されているとはいえども、もともと皇女邸は要塞ではなく、個人の私邸を想定して作られている。

「アリシア、これの一体どこが“市民”なんだ? ただの狂信者集団じゃないか」

報告を受けて駆けつけてきた皇女は、現場を一望するなり端的な感想を述べた。しかしその表情は口調ほどにはふざけてはいない。

「は、申し訳ありません。ですが、彼等はベルグ市民の代表を名乗っているようです」

「市民の代表”ね。包丁でもナタでもなく、槍や剣などの武器を手にした“市民”とは、これまた物騒な世の中になったものだ」

平民であれば、鍛冶屋の店主でもない限り、槍や剣などの本格的な武装を手に入れるのは難しいはずである。手に入れられても、その数は限られたものであるはずであり、面前の集団のように、手に手に立派な武器を握りしめているのは、明らかに不自然にうつる。

とりあえずは現状把握が先決だった。

「現場責任者はどこだ！ 警護達の隊長はどこにいる！」

皇女は声を張り上げる。混沌の中で、走り回る兵士の一人が皇女は認めて立ち止まる。

「これは皇女殿下！ いまご報告に上がろうとしていた所です」
姿勢をただし平伏しようとする兵士を皇女は制して、先をうながした。

「隊長は？」

「は、それが恥ずかしながら行方が分からないのです。暴徒がこの屋敷をとりかこんだ時には、もう隊長の姿は見えず我々が探している有様です」

「なら副隊長がいるだろう」

「さきほど急病で倒れました」

なんの冗談だ？ というイリユーシャの表情を受けて、若い兵士の顔がかかる。

「副隊長だけではありません。当直の兵士の多くがここに来て体調不良を訴えておりまして、

戦闘力はおろか、行動可能な人員自体が半減しております」

兵士の顔に浮かぶ憂慮はイリユーシャのものでもある。この夕イミングでこの符号はありえない。つまり何者かが兵舎の食事に一服もったということだ。そして隊長の失踪は、彼が既に死んでいるか、この件に一枚かんでいる事を意味している。そう考えて間違いはなさそうだった。

「なぜ報告が私の元に届かなかった？」

「最初は軽い体調不良であり、訴え出るものの数自体が少なかったのです。またー」

「もういい」皇女は苛立ちを隠そうともせず続けた。

「状況はどうなっている？」

「は、暴徒の数はおよそ五十名から七十名。暴徒はみずからを『ベルグ市民同盟』と名乗り、その正体は目下不明、その目的は――」

おりから、一際高い罵声が塀の外から響いてきた。

「門を開ける！」

「ラトギアの皇女を引きずり出して、俺達の前に膝まづかせるんだ！」

イリユーシャは首向する。

「なるほど、良く分かった」

『ベルグ市民同盟』――初めて聞く名前だが、その発言をかんがみるに科学と魔法に対して全否定の立場をとる宗教的原理主義の集団らしい。既存の過激派宗教団体の一派だと考えて間違いはないだろうが、問題はなぜ彼等が、彼等の非難する王立学院そのものではなく、そこに在籍するとはいえ、在学者の一人にすぎないラトギア皇女の館を選んで押しかけてきたのか、という点だ。

「もうベルグ王宮の方には報せは飛ばしたのだな？」

「はい」

まあ仮にその報せが届かなかったとしても、早晚、騒ぎを聞きつけて駆けつけてくるだろうが。

「では、残された者の中で、もっとも階級の高い者に指揮の代行を命じる……階級が同じなら、名前の順番でも決める」

少なくとも、いないよりはマシなはずである。

「は、しかし……」

本来、警護対象であり外国の人間であるイリユーシャに、そういった任命を出来る権限はない。

「この非常時だ、文句はあるまい。責任は私がとる。それともラトギアの第一皇女の命では不足か？」

「あ、いえ、とんでもございません！」

「では、その者の元、残された人員を集めて隊をまとめ、正門と裏門を固める。私個人の武器庫の使用も認める。ただし、私の命があるまで専守防衛以上の武力行使は控える。相手は一応“市民”を名乗っている。それ以外は全てお前達に任せる」

「はっ！」

「さて、と……」

走り去っていく兵士を見送ると、イリユーシャは後ろを振り返った。アリシアとナリタカはそれぞれ緊張した面持ちで一部始終を見ていた。

「何がなんだかよく分からないが、そういう事だ。どうやら外の自称市民どもの狙いは私らしいぞ」

アリシアの顔は青ざめている。

「一体なぜ？」

「ま、どこにいつても私は民衆に嫌われる運命にあるという事だな」

ラトギアでは世論を騒がせる悪名高い皇妃の娘として。ここベルグでは国力を嵩にきて無理難題をつきつける大国のラトギアの第一皇女として。

“蛇蝎のごとく”とまでは言わないまでも、どちらかというと嫌われている部類に入るだろう、自分は。

イリユーシャは自嘲する。

しかし、ここでの自分の風評がいかにか悪かったとしても、それだけでは“市民”が自発的に外国の要人――つまり自分を襲う理由にはならない。

ましてや、その六十名からの集団が騒ぎ一つおこさず閑所を抜けて王宮区画まで侵入し、あまつさえ自分の屋敷を取り囲んでいる説明には成りえない。

「あの、シンハヴァイン様は？」

「あいつは肝心な時に、いつもいない。そういう奴だ。今日は朝から護衛隊の宿舎の方についているはずだ。もっとも外の様子を見る限り、いまさらのこのこ帰ってきたところで簡単に屋敷の中には入れんだろうがな」

アリシアは不安気な表情を深めた。

その隣で、硬い表情をして沈黙を守っているのはナリタカだ。さきほどから何を考えているのか、一言も話そうとはしない。

まさか、禁術を使った事がばれた訳であるまい、とイリユーシヤは頭をめぐらす。とすれば、彼等の狙いは禁術関連ではなく、ラトギア皇女としての存在価値、否、利用価値か。それでも色々と疑問は残るが……

「案ずるな」

イリユーシヤは肩をすくめる。

「数の利はともかく、地の利人の利はこちらのものだ。あつちは素人、こつちの手勢は曲がりなりに職業軍人。それに屋敷に立てこもっている限り、向こうも簡単には手を出せないはずだ。我々王宮から鎮圧部隊が送られてくるまで、せいぜい高みの見物を決めこんで待つていればいい」

「……それは、そうなのかもしれません」

「アリシア、お前はナリタカでも連れて屋敷の中に退避している。外は危険だ」

アリシアは毅然と顔をあげ、首を横に振った。

「殿下お一人をこんな所に残して、自分だけ避難することなど出来ません」

「では任務だ。屋敷の人間を集めて、彼等の動揺を沈める。お前人をあやすのは得意だろうか？」

アリシアは重ねて首を振った。

「私ども侍女侍従を初め、この屋敷の中にいる者は一人残らず皇女殿下にお使えする身。殿下の身の安全を最前と考えるのが私どもの務めであり、またそうする事に誇りと喜びを感じております。ですからどうぞ私どものことはお構いなく」

今にでも、この身を皇女のために投げ打って惜しくない。そんな目をしている。真性からの忠誠と呼ぶべきか、盲目的な心酔と呼ぶべきか。

アリシアの熱のこもった決意を、イリユーシャは冷めた表情でみやった。

「勘違いするな、アリシア」

絶対零度の声が、アリシアを突き放す。

「足手まといだといっている。兵士ならいざしらず、侍女であるお前が一緒にいても邪魔なだけだ。ましてや何かが起こり、侍女を盾にして我が身を守ったとでも噂が立てば、私の名にこそ傷がつく」

「でも、イリユーシャ様ー！」

「くだい、これは命令だ」

今生の別れでもないだろうに、アリシアはあられもなく涙を流しはじめた。紅潮した頬を、後から後から涙の筋がつたい、あてどもなく滑り落ちていく。

「分かったら早く行け」

「……い、嫌です」

アリシアの大袈裟なまでの心配と、異様なまでの固執のしようは、イリユーシャは苛立たせる以上に戸惑わせた。後にして思えば、それは女性特有の感の良さだったのかもしれない。

言ってみれば、彼女はその猟犬のような嗅覚で、これから起こるうとする事を、主人に忍びよる危険の匂いを誰よりも正確に察知していたのだ。そうイリユーシャ自身よりも正確に。

「なら僕がアリシアさんの代わりに残りますよ」

事態を収拾したのは、どこか投げやりに放たれたその一言だった。それまで黙って二人のやりとりを聞いていた招獣ナリタカは、驚いたような皇女の視線を見返していった。

「僕があなたの……皇女殿下の側に残ります」

第十話 擾乱 (2) (後書き)

第十話 擾乱 (3)

「僕は殿下の侍従でもなければ、もちろん侍女でもない。僕はこの国の人間でも皇女殿下の国の人間でもない。戸籍も身分も階級もない。それどころか……」

人間である事ですら認められてない。

「どうせ役に立たない同士なら、僕の方が適任です」

別に皇女が心配なわけではない。この世界のいざこざに首を突っ込みたいとも思わない。

ただ何か危険な場所にいくというのなら、誰かを心配して守りたい人間よりも、死にたくとも死ねない人間が行くほうが合理的ではないかと思ったのだ。

そこにいるだけなら、足手まといになって切り捨てられるだけなら自分にも出来る。

「でもナリタカ様……」

「そういうことだ、アリシア。ナリタカはこう見えて実はなかなか人間離れした奴でな」

おそらくアリシアを遠ざけたい一心で皇女はナリタカの主張を支持した。“人間離れ”という箇所にとちよつと笑えた。

ナリタカは、まだ心配そうなアリシアに向かって微笑を作り、皇女の脚本にあわせた。

「とうわけですから、安心してください。僕がアリシアさんの代わりに皇女殿下の側にいます。頼りないかも知れませんが、もしも時には盾になれるよう頑張りますから」

「でもそんな、それではナリタカ様が……」

「僕なら大丈夫です」

ナリタカは笑った。

「大丈夫なんです」

「嘘つきのホラ吹きだな、お前は」
物見台から外の様子を眺めながら、皇女は、ぼつりとそう言った。

「何が大丈夫です、だ。剣も握れなかつたくせに」

「……」

ホラはともかく嘘をつくのは得意なほうだ。

「あなたこそ。そんなに大事なんですか？」

「何が？」

「アリシアさん。足手まといとか言つて本当は彼女を心配して遠ざけたかっただけなんでしょう？」

皇女はしばし沈黙した。

「私がそんなにお人よしに見えるか？」

「誰にだつて弱点はあるんじゃないですか？ 彼女はあなたにと

つてただの侍女じゃないんでしょう？」

「……ずいぶんと態度がでかいな。さっきまでうずくまって泣き喚いでいたのはどこの誰だ」

皇女の言う通りだ。そういえば何故だろう？

開き直りか。単に死に損ねた自分だから、死に場所を求めているのか。それとも、このイリユーシャという人間に少しばかりの興味を抱き始めているのだろうか？ 分からなかった。

「論点をそらさないでくださいよ」

「……“足手まとい”というのは本音も本音だ。ただ何だ、いち

おう乳姉妹だからな。出来れば、あいつが血を流すのは見たくない。ベルグくんだけまで連れてきた責任もあることだしな」

少し意外だった。乳姉妹だろうと何だろうと、この皇女に情にほだされる部分があったとは。

ナリタカは今まで漠然と、皇女のことを冷徹でワガママで傍若無人な人非人だとばかり思ってきた。だがどうやら、皇女の人非人ぶりは相手がナリタカの時に限られているらしい。

「それに少しばかり自信がない……いざという時、アリシアを――」

皇女は沈黙をはさんだ。

「あいつを迷わずに切り捨てられる自信が」

まるで切り捨てるのが大前提でもあるかのような物言いだつた。

「切り捨てるって……」

知らず口調が刺々しくなった。

「切り捨てなきゃいけないんですか？」

「状況がそれを要求すれば」

「状況って何の――」

ナリタカはその先を追及しようとして口をつぐんだ。自分が何を熱くなっているのか、なぜアリシアの心配をしているのか、なぜ皇女の言葉に苛立つのか、分からなくなったからだだった。

関係ない。自分には関係のないことだ。そうではないのか？

結局ナリタカは代わりにこう言った。

「それは僕だったら、迷わずに切り捨てられるという事ですかね」

「まあそうだな」

「いっそ清々しいほど、はっきりした返答ですね」

「そうだな」

生返事を返す皇女の視線を追って、ナリタカも視線を移した。邸を取り巻く、人、人、人の群れ。手に手に武器をもって胴間声を上げる彼等は、ナリタカに教科書の挿絵を思わせた。

「まるで革命ですね」

「カクメイ？」

言われてみれば、『皇女殿下』が闊歩する世界に革命は存在しないのかもしれない。

「ええと、民衆が……平民っていつんですか？　そういう人たちが、あなた達みたいな王侯貴族の支配階級に反乱を起こして、代わりに国をおさめる権力を手に入れる、みたいな話です。確か」

教科書に乗っているような立派な定義は出来なかったものの、大筋では間違っていないだろう。

案の定、理解不能の沈黙がナリタカを待っていた。

「……お前のすんでいた世界での話か」

多少誤解があるようだが、ナリタカは構わずに「はい、そうです」と答えておいた。

「別名、民主化っていうそうですよ。僕の世界では……大体そういう風に政権が民衆の手にあるのがスタンダードです」

「民主？　民が主導して国をおさめる、か……共和制のバリエーションという事か？」

いや、共和制の対義語は確か君主制であって民主制ではない。イギリスのように立憲君主制でも政治形態が民主制であれば民主主義

国家なのだが……まあいいや。

「……まあそんな感じだと。とにかくそういう訳で、ぶつちやけ僕には民衆の怒りを買った貴女の方が悪者にしか見えません。マリ―アントワネット様」

「……まあ、食べるパンがないの？ だったら剣の鍛錬でもして空きっ腹を紛らわせばいいではないの。」

「誰だそれは？……盾になってくれるんじゃないのか？」

「盾？ そんな事いいましたっけ。でもアリシアさんが貴女の盾にされるのは何か間違ってるでしょう」

イリユーシヤは眼下の様子から視線を外さずに聞いた。

「惚れたのか？ アリシアに」

「いえ、むしろ嫌いなタイプです。それよりこうして待つてるだけなんですか？ えと、ベルグ宮廷からの救援を？」

「他に何が出来る？ 市民を名乗っている相手にこちらから事を構えろともいうのか？ そもそもこれはベルグ政府が処理すべき問題だ。この国の人間ではない私が何かしても藪蛇でしかない。下手を打てば国際問題だ」

「まずは彼等の言い分を聞いてみて、呼びかけてみるとか」

「何をだ？ 平和をか？ 解散をか？ それとも外国人の私がベルグ王家ならびに議会の全権大使に成りすまして何か取引でもしろと？」

「……」

「だがまあそうだな。下手に刺激するのも上手くないと思って
いたが、こうして睨めっこしていても、かえって緊張が高まるだけか
もしれー」

その時、一際たかい、ときの声があがった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6088b/>

皇女と招獣

2010年10月13日12時53分発行